

人生一〇〇年時代の「大きな物語」

『歎異抄』を読む

義なきをもって義とする

目次

はじめに	5
・ 親鸞の語る浄土の話	6
・ 仏教の大きな物語	10
・ ブッダ	13
・ 阿弥陀仏	17
・ 『歎異抄』の著者唯円について	21
・ 題名と構成	22
第一章 『歎異抄』本文の前編	25
序 易行の門	25
第一条 阿弥陀仏の本願	28
第二条 ブッダから七高僧による伝授	29
第三条 悪人正機説	33
第四条 慈悲	35

第五条	山川草木 悉有仏性	39
第六条	阿弥陀仏の勅命	40
第七条	念仏は無碍の一道なり	42
第八条	念仏は阿弥陀仏のおはたらき	45
第九条	娑婆の縁がつきたとき	46
第二章『歎異抄』本文の後編		53
第十条	義なきをもつて義とす	53
第十一条	名号の不思議	57
第十二条	本願に逢う喜び	59
第十三条	煩惱具足の凡夫	61
第十四条	一念の念仏	65
第十五条	浄土の彼岸	68
第十六条	回 心	71
第十七条	愚者になって往生する	73

第十八条	ブツダの三身	74
後序	信じる心	77
流罪記録	唯円著	85

注 釈

* 1	親 鸞	87
* 2	煩惱(ぼんのう) 具足の凡夫	89
* 3	本願 第十八願	90
* 4	蓮 如	91
* 5	慚 愧(ざんぎ)	92
* 6	回向文(えこうぶん)	93
* 7	六道輪廻の迷いの世界	94
* 8	宿 業(しゆくごう)	96
付録	人生は四苦八苦 生死出づべき道を求めて	101
	『酒は涙か溜息か』	104

『風のみち』	105
『私の小さな幸せの花』	106
あとがき	107

はじめ

『歎異抄（たんにしょう）』は、九十年にわたる波乱の生涯を、ただ一筋に生死を貫く真実を問いつけた稀代の宗教者 親鸞（*1）の心の軌跡をあざやかに記しとどめています。現在でも読み続けられている日本の代表的な古典の一つです。この書に記録された親鸞からの口伝の条は、親鸞の晩年八十歳を過ぎてから語られたものです。

『歎異抄』の講義を多くの先生から聞きました。そして先生方からは、この本は、自分の心を通して読まなければ決して理解できない、といわれたことが私の心に残っていました。私は八十四歳乙巳の年になったときに、『歎異抄』を自分の言葉で書いてみようと言学非才を顧みず思いたち、本にすることにしました。

親鸞は、晩年を京都で過ごしました。関東から京都に命がけの旅を続けて、訪ねて来た門弟たちの問いに、まるで真剣でわたり合うような厳しい口調で、みずからの信念を語っています。ときには春の光がすべてを暖かく包むように、門弟たちの悩みを包容しながら、新しい心の視野を開いていきました。また時には切れ味のよい逆説をつかって、人びとの常識の虚構を打ちくだき、宗教的真理の世界へと導きました。

人生一〇〇年の時代となり、高齢者には健康寿命の延長とともに、生老病死という人間の「苦」を生き抜くために、この書を通じて、無宗教がいいと思っている人にも、新たな視点を提供する「大きな物語」として読んでいただければ幸いです。

・親鸞の語る浄土の話

本書では、インドから中国を経由して日本に伝えられた、オシャカ様として親しまれてきたブツダの教えを、親鸞の説法から、理解を深めたいと思います。

現代では無宗教と自称する人が多いのですが、神さま仏さまに手を合わせます。人それぞれの冠婚葬祭の行事や各地のお祭りなど、日常生活のなかには、宗教的なものが息づいています。宴会やお祝いの席の最後には * 一本締めや二本締めで終わることが多いですね。一方、世界では戦争がいまだに絶えず、その背景には宗教的な対立が際立っているように見えます。日本でもサリン殺害事件を起こしたオーム真理教や、旧統一教会問題は安倍晋三元首相への銃撃事件を引き起こしています。「宗教というのは、なんだか恐ろしいものだ」「宗教には近づかない方がいい」という意識が、日本の多くの人に根づいています。

宗教の本質は、人間の理屈や理論だけでは本当の意味を理解できないものです。人類が地球上に生まれたのは五〇〇万年前のことといわれています。人間が各地に部落を作り集団生活をするようになり、人間の生死にかかわる儀式や、収穫を祝う祭りごとに原始宗教が生まれています。さらに集団を形成する民族ごとに民族宗教が成立されていきます。日本の神道が、その一つです。さらに宗教が世界的に広がり、多くの民族の信仰対象となる世界宗教に発展していきます。その一つの仏教は、紀元前六世紀に成立しています。キリスト教は紀元元年、イスラム教は紀元後七世紀に成立しています。これが世界の三大宗教です。その中に、またいろいろな宗派が生まれてきています。

人類が集団生活を営むようになり、宗教が生まれてきたポイントには三つあります。

一つは、情念や情緒の部分です。この部分は理屈で表わせません。人間の感性の部分です。深層心理にまで及ぶ領域に潜在します。大自然の中で、命の危機に直面する不安や恐怖心の中で、人間の心を支えるものとしてレジリエンス（心の耐久力、回復力）が必然的に形成されてきています。

二つは、言葉であらわされる教義と秩序です。神道には「古事記」や「日本書紀」という記紀がありますが、人間生活を規定する教義とか秩序について（法的なもの）の記述はありません。日本に仏教が大和時代、西暦五三八年に伝来して、飛鳥時代に聖徳太子（五七四〜六二二年）が国家の形成に役立てました。聖徳太子は十七条憲法を制定し、国分寺や国分尼寺などを建立しています。その後、仏教は神仏習合といわれる、日本土着の神祇信仰（神道）と仏教信仰が融合し、一つの信仰体系として再構成され宗教として形成されています。

三つは、人類の伝統的な習慣、儀式、お祭りなどです。いただき物があれば神棚や仏壇にお供えして手を合わせるなどです。これも宗教を支える柱の一つになっています。日本の宗教というのは、仏教でも神道でも、みな先祖崇拜を基本としています。

そうした思想や哲学だけで表現できない人間本来の活動として、宗教的なものは人類が誕生して以来、集団生活の中に生き続けています。それは国家の為政者とそれを取り巻く一部の権力者のためだけのものではなく、本来、人間個々の大衆のためのものなのです。

平安王朝時代の末期から鎌倉幕府の時代に登場した、法然・親鸞の仏教で特に大きなことは、体制の中の仏教ではなく、自分自身を見つめるための仏教ということでした。ブツダの説いた四諦八正道の真理の第一諦は、苦諦の「四苦八苦」です。生老病死の四苦から人間は、逃れられないということです。そして、自分が愛しているものと別れていく苦しみ、自分の求めているものが得られない苦しみ、憎しみ怨みをもつ苦しみ、そして思うようにならない心身の苦しみ（*五蘊盛苦）、この四つの苦です。これらの根本的な苦しみ、不安や無力感からの救いの道があるとすれば、それが人類の誕生以来脈々と人の心の中に生き続けている宗教であり信仰心でしょう。人はいずれかの苦にまみえることでしょう。

人生一〇〇年時代に、高齢者の生き方になかに、必ず訪れてくる死を迎えるための心の準備と覚悟が必要です。現代社会では、宗教に救いを求める人は極めて少なくなりました。医学が進化して、医療・介護施設が完備してきていますが、最期は一人で、安心して迎える心の準備はしておかなければなりません。

『歎異抄』は、不安や無力感に覆われた心を浄化して力を与えてくれえる浄土の「大きな物語」です。

* 一本締めのレストランは、日本書紀にも登場する生国魂神社（大阪市）にあります。

* 五蘊盛苦とは「色・受・想・行・識」の五つを五蘊（ごうん）といい、五蘊のはたらきが仏教の基本理念として唯識論等で説かれています。

・ 仏教の大きな物語

不安や無力感、呪術的なお祓いや神秘的なオカルト的な経験よって無くなるわけではありません。もし、そのような宗教あるいは信仰に導かれたとすれば、それは大きな誤りです。

紀元前から成立している仏教は、三法印といわれる「諸行無常」「諸法無我」「涅槃寂静（悟り）」へと連鎖する整然と筋立てられています。第一の「諸行無常」は、この宇宙が誕生して人類が生まれ、私たちは現在を生きている、この空間、その心や諸々の行・事象をいつています。そこには過去があり、今があり、未来があります。

そして一人ひとりが、今を、一つの大きな空間と時間の中に生きているのです。座禅と瞑想することにより、得られる世界でもあるでしょう。仏教には易行道と難行道の二本

の道があるといわれています。そういう仏教の教えの中で、浄土に往生する易行道の道を、『歎異抄』を読みながら、仏教の「大きな物語」を明らかにしていきたいのです。

自分の人生は思い通りにはならないという経験の連続で、事故を起したり病気をしたりケガをしたり、そのなかで、絶望や焦燥感が生み出されることもあります。仏教はそうした不安を乗り越えるために用意されています。世界の宗教の中でも、人間の愚かさが一番注目した宗教といえるでしょう。凡人を救うための宗教なのです。心身とも健康で、年金が行き届き、経済的に苦労のない飽食の時代、老後に何の不安もなく生きられる人には、宗教は必要がないでしょう。少子高齢化が進み、核家族で、老々介護、さらには独居老人が年々多くなっています。いずれ我が行く道と気が付いている人もいるでしょう。そういう人のために、人それぞれが「大きな物語」に出逢い、また自分自身の「大きな物語」が描けるようにしたい、それが本書の目的です。

仏教の基本原理は因縁生起、ひとことという「縁起」です。あらゆるものは縁により起きる因果の関係で成り立っています。ところが、その関係を全部知る智慧が私たちには

ありません。この複雑な因・縁・果のすべてを知り、見極めることは出来ないということに、人間が迷うのです。そして愚痴をこぼすのです。そこに、未練を残すという人間の愚かさの最大の要因があります。

あらゆる因果の關係が見えていけば、死ぬこともひとつの現象にすぎないから、おそらく恐怖することはないでしょう。智慧がないために、またそのことに気が付かないために、死ぬまで苦、煩惱（*₂）から離れられない人間の未完成さによる凡人の、苦しみが生れます。その未完成な自分を知り、それを乗り越えていくことができる、そのときに常識を超えた、不可思議な「大きな物語」に出逢うことができるのです。

『歎異抄』は、今までに聞いたこともないような「大きな物語」です。日常生活で満足している立場の人にはおかしな話と思えるかもしれませんが、それがなくても生きていける幸せな人もいます。しかし、この物語に出逢うことで、不安や絶望感、無力感で揺らいでも、揺らぐままに安心して生きていけるような「錨（いかり）」が見出せるでしょう。

・ブツダ

梵語シャーキヤムニ・ブツダを漢字で音写すると〔釈迦牟尼仏〕となります。釈迦は種族の名、牟尼は聖者で、釈迦族の聖者の意です。仏は、悟りを開いた人、如（真理）の世界より来られた人を意味します。略称としては敬意を表して釈尊、ブツダ・仏あるいは釈迦如来ともいわれます。仏教の開祖です。今から約二五〇〇年前、インドの釈迦族の王、淨飯王を父、摩耶（マヤ）夫人を母として、今のネパール南西部インド国境に近いルンビーニ園で誕生しました。

ブツダは二十九歳の時、道を求めて出家し、多くの師を歴訪しましたが満足できず、ナランジャナー川のほとりの山林で六年間にわたり修行・苦行しました。三十五歳の時、のちにブツダガヤと呼ばれる地の菩提樹の下に座って瞑想し、ついに悟りを開きます。成道後、梵天（インド古来の神）の勧請によって伝道活動することを決意し、鹿野苑（現在のサルナート）に行き、五人の弟子に、はじめて説法（初転法輪という）をします。以後一心に布教と伝道活動をし、四十五年間各地を巡って八十歳の時、クシナガラ（現在の沙羅樹のもと）に身を横たえて入滅しました。

生誕の地ルンビーニ、悟りをひらかれた地ブツダガヤ、初転法輪の地サルナート、そして、入滅された地クシナガラが、ブツダの四大聖地とよばれています。

ブツダの四十五年間の伝道活動の記録は、ブツダ寂滅後、仏弟子たちによって口伝で伝承されました。文字として著作は残されませんでした。仏像も残されていません。それはインドの古代からの文化が偶像とか文字によらずに、耳で聞き伝えていく記憶暗唱により口伝で伝承されたものだったからです。

ブツダの教えが仏典として文字に書かれたのは、ブツダ入滅後二〇〇年ほど経過してからです。ブツダの仏像がつくられたのも、そのころからで、それ以前は仏足跡として、ブツダの足形を石に刻み、仏弟子たちは礼拝しました。

ブツダとほぼ同じころ、西洋哲学の基礎をつくったソクラテスが誕生しています。ソクラテスはブツダと同様に自身の手で著作は一冊も残していません。著作という形で後世に残したのは弟子のプラトンでした。

ブツダの教えを經典として記録する初期の活動は、インドの北西の地、現在のパキスタンと国境を接するガンダーラ地方だといわれています。主な經典には『般若心経』、『法華経』、『華嚴経』、『涅槃経』、『大日経』、『無量寿経』などがあり、大乘仏教の經典です。ブツダの教えの初期のものは原始仏教として文献が残されています。ブツダの悟りを求め修行を主とする小乗仏教は、大衆を救済する大乘仏教に発展して經典が整えられました。歴史学者や仏教学者の多くは、大乘仏教は、ブツダの教えそのものではないと、ブツダの教説であることを否定する人がいます。

しかし、その後、大乘仏教は、インドから中国を経由して日本に伝わりました。仏教經典の特色は「八万四千の法門」といわれるように仏道の道は、極めて多数に展開されたことです。それはブツダが、ブツダの弟子になった修行僧や、伝道の旅で出会った人々、あるいは説法を聞きに集まった人々に「対機説法」「応病与薬」といわれる説法をおこなってきたからでしょう。

阿弥陀仏は大乘仏教の仏さまです。ブツダが「南無阿弥陀仏」と称えたという歴史的な事実があったかどうか議論することは、ほとんど何の意味もないことでしょう。歴史的な

事実よりも、思想構造の問題です。ブッダが四十五年間の対機説法の中で、大衆に仏の慈悲の心を説き、救いの道を示されたことです。その道として浄土往生の道が説かれていたでしょう。ブッダ入滅後の二〇〇年を経過して、明らかになったことと考えられます。そのように主張される仏教学者、歴史学者は少なくありません。

浄土三部経の一つで、鳩摩羅什訳の『仏説阿弥陀経』の書き出しは「われ聞きたてまつりきに、．．．千二百五十人と俱なりき」とあります。ブッダの生きた時代に、今のような大勢の人を集め講演するような公民館があったわけではありません。拡声する音響機器もありませんでした。弟子たちに口伝えて伝承されていたのです。各地で長い間、ブッダが、仏教教団のプロデューサの立場で、一つの大きな物語として、浄土往生の道を説いていたのでしょう。そのようなブッダの教えをヒントとして大乘仏教と呼ばれる教えの経典が編纂されていったと考えても、何の不思議はないでしょう。



薬師寺の仏足跡
謹写（筆者）

・阿弥陀仏

仏教には壮大な宇宙観があります。釈尊（ブツダ・仏）がこの世に出られる以前の過去の世界にも、繰り返しブツダは誕生しています。釈尊は、悟りを得て、真理に目覚められ、仏法を説かれました。「如」は真理の世界のことです。人を救うために「如」の世界から来られる「如来」は、神様のような超越的な存在です。そしてその「如」の世界から、ブツダはやって来られました。ですから釈迦如来と呼ばれます。「仏」のことを「如来」とも表現します。

阿弥陀仏の信仰あるいは浄土信仰というのは、その起源はかなり古く、釈尊が誕生し仏教が成立するより遥か以前からあったようです。しかし南無阿弥陀仏を名号とする阿弥陀仏信仰は、広大な仏教体系フィールドの中にある経典として表された大乘仏教の「救いの原理」の中から成立しています。

日本では、比叡山で修行して、当時、智慧第一の僧侶と敬われた法然が、浄土宗の開祖となっています。『選択本願念仏集』という著書を表されています。そこで、すべての修行

の中から「南無阿弥陀仏」という名号を称える「念仏」により、あらゆる「苦」から救われると説かれています。「南無（ナモ、ナム）」はインドのサンスクリット語で、「ナモ」を音写した漢字です。敬意、尊敬、崇敬の意味で、仏教では、帰命するとか帰依する、「ゆだねる」「おまかせする」ということです。つまり、教えの根本として従う、それほどに大事に敬う、信賴するという意味があります。

『無量寿経』という經典に、阿弥陀仏がどのような如来なのか記されています。法蔵菩薩が如来になられるという物語です。物語として書かれていることに意味があります。仏教を哲学・思想としてとらえる知識人は多くいます。しかし、我々の言葉では、とても言い尽くせない、そういう宗教的な象徴への関わりとか営みが、宗教の本質です。阿弥陀仏は、仏教による救いの主であり、善悪、貧富や強弱、あるいは知識の有無などにまったく関係なく、すべて平等に救う存在なのです。

阿弥陀仏は、限らない光、無量光（アミターバ）と、限らない命の働き、無量寿（アミターユス）の象徴なのです。ですから阿弥陀（アミダ）とよばれる仏なのです。

『無量寿経』には、ある国王が出家して法蔵という名前の菩薩となり、長い修行を経て悟

りを開き、阿弥陀仏となった、と説かれています。これは明らかに、お釈迦さまが生誕して悟りを得て、仏となられたストーリーです。

『無量寿経』に書かれている法蔵菩薩の物語を要約すると次のとおりです。

はるか昔、世自在王仏という仏さまがおられました。そのとき、ひとりの国王が、世自在王仏の説法を聞いて深く喜び、この上ない悟りを求める心を起こし、その国の王位も捨て、出家して修行僧となり、法蔵と名乗りました。

法蔵が「仏」を目指して修行しているときの呼び名が法蔵菩薩です。「菩薩」は修行を完成して「仏」になるまでの呼称です。法蔵菩薩が、阿弥陀仏という名の如来になられたのです。ですから阿弥陀如来ともよばれます。

法蔵菩薩は、五・劫（こう）の時間をかけて、浄土を建立し、人々を浄土に往生させ救い取るといふ、四十八の願（*3）を建て遂行すると誓われました。これを誓願といいます。そして、これを成し遂げて仏になられました。今も、阿弥陀仏は西方浄土におられ、すでに十劫という時が経っています。

以上が『無量寿経』に書かれている大きな物語です。

*劫（こう）は、梵語カルパの音訳です。インドの時間の単位で極めて長い時間を表します。一劫は、七キロメートルの四方と高さの石を一〇〇年に一度ずつ天女が来て薄い衣で払って、その石が磨り減って無くなるまでの時間といえます。あるいは一辺が七キロメートルの鉄の箱があり、一〇〇年に一度ケシ粒を一粒入れていき、その箱がケシ粒で一杯になるまでの時間という、途方もない永遠の時間をいいます。インド哲学では一つの宇宙が誕生して消滅するまでの時間といわれます。一劫は、四十三億二千年という一説もあります。

現在の宇宙物理学者は、ビッグバンにより一三八億年前に「無」から、あるいは「空」から、誕生したと推定しています。したがって十劫という時間は、現代の物理学者が推定する宇宙誕生のときより遙か以前に遡るのです。

・『歎異抄』の著者唯円について

『歎異抄』の著者の原本は伝わっていません。現存する最古の書写本は、西本願寺に所蔵されている浄土真宗本願寺派の第八世宗主蓮如^{(*)4}(一四一五―一四九九)の写本です。この写本やその他の古写本にも著者名は書かれていません。『歎異抄』の著者は誰だったのか、諸説がありました。しかし、今では、親鸞の直弟子で、常陸の河和田(現在の茨城県水戸市)に住んでいた唯円が、この書の著者であるという説が最も有力です。

河和田の唯円(一二二二―一二八九頃)についてもあまり正確な伝記はありません。水戸市河和田町の唯円開基の寺である報仏寺の本尊の台座に墨書銘があり、彼の忌日は正応元年八月八日と記されています。これによれば、その往年は正応元年(一二八八)ということになり、親鸞滅後二十六年ということになります。

一説によると、浄土真宗本願寺派第三世宗主の覚如に、唯円が正応元年に上洛のとき、『歎異抄』を献本したと伝えられています。覚如の次男従覚が、父覚如の滅後に著された『慕歸絵』という覚如伝の中に、唯円は、親鸞の門弟のなかでも、特にすぐれた学徳兼備の大徳としてあがめられていたと、記されています。

・題名と構成

『歎異抄（たんにしょう）』とは、文字通り「信心の異なることを歎く抄」です。「抄」とは、「すぐれた言葉や難語をぬき出して注釈すること、またその注釈書」（広辞苑）といわれています。

この書は、全十八条からなっています。最初の序は前半の親鸞語録についてのもので、前半の第一条から第九条は、著者唯円が、親鸞から聞いた語録として記述したものです。第十条は、著者唯円の後半著作分への序文です。後半の第十一条から第十八条が、親鸞の語録が正しく理解されていないことの唯円の歎（なげき）として記述したものです。

従って前半の語録と、後半の歎異との対応があります。特に明らかなのは、語録の第一、第二、第三条と、歎異の第十一、十二、十三条が対応しています。

後序のあとに、「流罪記録」として、一二〇七年に親鸞が三十五歳のとき、後鳥羽上皇によつて越後の国に流される承元の法難の記録が書かれています。

そして結文には、書写本に、蓮如（*4）の書いた添え書きがしるされています。

第一章

『歎異抄』

本文の前編

第一章 『歎異抄』 本文の前編

序 易行の門

ブツダが悟りを得て仏教という教えを世に残しました。釈迦族の王であったブツダが王城を出て、六年間の難行苦行の末に悟りを得たのは三十五歳の時といわれています。そして八十歳で入滅されるまで、四十五年間ひたすら仏教の教えの伝道活動をされました。出家した修行者を集め、あるいはインドの各地で、日常生活をしている一般大衆に説法をする、伝道の旅をされました。その説法は、「対機説法」と言われて、出家僧侶の悟りへの道を示すものだったでしょう。また、一般大衆には、困難な修行の道ではない日常の不安や悩み事への解決の道の教えであつたでしょう。その説法は「応病与薬」ともいわれるものでした。

仏教の教えの道を大きく分けると、易行道と難行道の二つの道があります。富士山の頂上を目指す道に、山梨県の吉田口からのルートと、静岡県富士宮市からのルートなど、行きつく先の目的地は同じでもいくつかの登山道があるように、仏道にも、いくつか異なつた道があります。易行道は浄土門から入る、難行道は聖道門から入るといわれています。

そして、仏教の悟りを得る道には、自分自身の修行の結果である自力により得られるという教えの修行の道と、自分自身は愚かな凡夫であるという気付きから、如来の本願力により救われていく道、それを他力より救われていく易行の道といい、この二つがあります。親鸞の教えは、如来の本願力により救われていく道、いわゆる浄土門から入る易行道です。この、「易行の道」という「本願他力」により浄土に往生する道が、門徒の人たちに正しく伝えられていないことを歎き、後々疑惑を招くことがないように、不審を晴らすことが本書の目的であると序文に書かれています。

平凡な人生を過ごして、定年退職した一般人には、厳しい修行や座禅により、あるいは瞑想を繰り返すことにより仏教の教えの神髄に気が付くには、時間的にも体力的にも困難なことです。ブツダの教えの中から、大乘仏教の浄土門の道を明らかにした先師は、凡人には、どうしても到達することができない修行と難行の道ではない、浄土に往生していく易行の道を示されたのです。

法然や親鸞が、比叡山で修行した後、山を下りて浄土門につかれたのは、王朝貴族の支

配する社会から、武家による幕府が支配する時代に移り変わる時代でした。武士が天下統一のため、命を懸けて支配地の争奪に戦い、大衆は支配者の搾取の下に農地で働き明け暮れる時代でした。支配者の下にいる武士や大衆が、易行道の仏教に救いを求めたのです。

現代の社会で、人生の最後の一步、これをどう迎えるか悩み苦しんでいる人がいます。

*老人力が付いて幸せに生きている人もいます。しかし、慚愧(*5)に悩み、孤独に寂しく生き、身体に障害を持って身動きがままならない、あるいは認知能力が衰え介護支援のサポートに頼らざるを得ない人がいます。

ブツダの教えの中で、易行道は、衆生の救いの道なのです。

*『老人力』 赤瀬川原平著　ちくま文庫

第一条 阿弥陀仏の本願

仏教の「大きな物語」は、まず、浄土の世界を創ろうと誓ったところがスタートです。弥陀の誓願というのは、阿弥陀仏（弥陀）が、この宇宙空間に浄土をつくり、人々を往生させ、救い取るという、願を立て遂行すると誓われたことです。阿弥陀仏が、浄土の建立には五劫という永遠の時間がかかっています。そして浄土が出来上がってから、すでに建立に要した時間よりはるかに長い十劫の時間が経過しています。

神々の降臨とか、人類の創造主である神の存在を信ずる宗教がありますが、有史以後の数千年の歴史上の物語です。インドで、悠久の時間に宇宙の誕生以来、自然を見つめて生まれた、人類の智慧は、宇宙誕生の時間を超えて不可思議という表現で理解するしかありません。ブッダが誕生して、久遠の時間に育まれた智慧を、説法として語り、やがて文字に表されて仏典として成立されました。

『無量寿経』には、阿弥陀仏が誓った誓願として四十八の願が記されています。そのうちの第十八願が本願（*3）と言われています。本願は、この誓願を信ずるものは、必ず阿弥陀仏が浄土に救い取るというものです。この力を本願力といい、人間に自己努力（自力）で

は獲得できないもので、「自力」に対して「他力」とよばれます。「本願他力」は阿弥陀仏の力のことです。この力を、宇宙に存在する阿弥陀仏の力で、常に、無量寿、無量光として、私たちに届いている「宇宙力」とよぶことができます。

ですから、本願を信じて念仏すること、これに勝る善はなく、これを妨げる悪はないのです、と本条ではいっています。

原文は次の通りです。

「弥陀の誓願不思議にたすけまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて念仏申さんとおもひたつところのおこるとき、すなわち摂取不捨の利益にあづけしめたもうふなり。」

第二条　ブツダから七高僧による伝授

親鸞は、浄土宗の開祖である法然から仰せさずかった念仏で往生できるという教えを、ゆるぎない信心としている、という表明の条です。そしてブツダの説教が、親鸞まで正しく伝えられてきている、という確信が述べられています。

この条には、そのことだけが端的にしるされています。

ブツダの教えを伝える膨大な經典の中から、易行道の教えを読み解いて、南無阿弥陀仏の名号を称える「念仏」が、どのように親鸞に伝授されてきたのでしょうか。それは親鸞が書かれた經典『教行信証』に書かれています。親鸞はブツダの教説を伝承した七人の高僧（七高僧）を相承祖師として、その著述された書から引用されて、浄土門の教義が、どのように確立されたかを示されています。各祖師は、ブツダの教説から浄土門に関する独自の見解を発揮されています。

特に、本条には、中国の善導大師が浄土の教えを正しく伝えたと示されています。善導の著述である『観経疏』で、*浄土三部經の一つ『観無量寿經』について、従来、伝承された解釈を改めて、浄土門へ導く最も重要な經典であることを示されました。これを善導の発揮した独自の見解「古今楷定」として示されました。善導の解釈を、親鸞は、師である法然から伝え聞いたことだと、本条には書かれています。

相承祖師	生国	年代	主な著述	発揮（独自の見解）
一 龍樹菩薩	インド	一五〇～二五〇頃	十住毘婆沙論	易行道を示す
二 天親菩薩	インド	四〇〇～四八〇頃	浄土論	浄土往生の道を説く
三 曇鸞大師	中国	四六七～五四二	往生論註	本願他力を示す
四 善導大師	中国	六一三～六八一	観経疏	古今楷定する
五 道綽禪師	中国	五六二～六四五	安樂論	聖道と浄土を判別
六 源信和尚	日本	九四二～一〇一七	往生要集	浄土の報化二土を示す
七 法然上人	日本	一一三三～一二一二	選択本願念仏集	称名念仏を選択

第一祖の龍樹の書いた『十住毘婆沙論』の中に易行品という章があります。十住は、菩薩となる初地を歡喜地、そして如来となるまでの十地をいいます。「毘婆沙（ビバシャ）」は、梵語です。漢字で「勝説」あるいは「広説」が当てられます。南インドで生まれた龍樹は「空」の思想を理論化しました。そして自らの力、修行して悟りの境地に達する難行道は、人間には極めて困難な道だとして、阿弥陀仏の本願に帰する易行道をすすめられました。

た。そして、易行道を、船に乗っていく楽しい水路の道にたとえられました。難行道によって悟る、あるいは救われていくことの困難さを知って、人間の力の弱さ、無力さを痛切に感じた者が、はじめて、念仏により浄土の世界に渡る願力の船に乗ることができ、如来の“はからい”に、まかせることができるのでしよう。

原文は次の通りです。

「弥陀の本願まことにおはしまさば、釈尊の説教虚言なるべからず。仏説まことにおはしまさば、善導の御釈虚言したまふべからず。善導の御釈まことならば、法然の仰せそらごとならんや。法然の仰せまことならば、親鸞が申すむね、またもつてむなしかるべからず候ふか。」

* 浄土三部経は、『無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経』の三つの經典です。

第三条 悪人正機説

よく知られている親鸞の「悪人正機説」です。善人が往生をとげることができるのなら、ましてや、悪人が往生をとげるのは、当然のことではないか、といっています。一般常識とは逆のことを言っているのです。親鸞のいう悪人とは、慚愧(*5)の心をもっている人のことです。逆に善人は慚愧の心の無い人のことです。「慚愧」という仏教用語は、「恥をかく」「反省ばかり」と、過去を振り返り嘆くことの多い人の心をいいます。

悪人正機説は、『教行信証』をはじめ、親鸞自身の著作には、まったく説かれていません。日常の道徳や倫理とは別の次元に立って、逆説的に善悪の問題をとらえ表現し説法しているのです。

このような親鸞思想の解釈を仏教用語で表現しましたが、現代的な一般用語で「機」は大衆すなわち「人」のことです。ブツダの「対機説法」の「機」がこの意味で使われています。

そこで、悪人というのは「バカ者」、善人とは、「教養のある者」と置き換えてみます。「教養ある者が往生することができるのなら、バカ者が往生できるのは当然のことだ」

となります。常識的には、「バカ者が往生するのであれば、教養のある者は往生できるのは当然のことだろう」というところです。

だれでも悪人とかバカ者よばわりされたら、冗談いうなよ、失礼な、とよい気持ちにはなれないでしょう。現代人がこの条を読むと、誰でもバカ者は自分のこととは、素直に受け取れないでしょう。私は社会人として生きてきて、それなりの一般教養は身に付けていると思ってきました。ところが、自分の生きてきた世界は、本当に限られた世界でしかない、ということに気付くこともありました。専業主婦は苦労して日常家事の仕事をしてきています。亭主とよばれ、企業戦士として定年退職した人には、主婦からは「バカ者」と見られているかもしれません。

親鸞の時代に武士、現代では企業戦士は、時代を背負ってきたような人で、自分の力を信じて、生き抜いてきた善人たちです。そういう人たちを、親鸞は「自力作善」の人といっています。

「立派に生きて栄光に満ちた人が往生できるのなら、恥をかいいたり、反省ばかりしているバカ者が往生できるのは当然のことでしょう」

と、親鸞はいいいます。

「善人」という教養ある人は、「自力作善」という自分の努力で生きている人で、バカ者ではありません。「悪人正機説」というのは、「バカ者が救われる法」といえます。

さらに親鸞は続けます。バカ者は教養もなく、支援してくれる頼る人もない不幸な人です。この人は一念の念仏で救われることを願うのです。バカ者は、救われるとは思っていないでしょう、また願ってもいないでしょう。そのバカ者が如来の救いの目当てだ、というのです。ですから、念仏は自分の力をするのではなく、如来の本願他力によるものだ、ということです。これが親鸞の「悪人正機説」の有難いところです。

第四条 慈悲

仏教では、慈悲の心と実践は重要なテーマとして、どの宗派でもその教義に書かれています。観音菩薩は慈悲の菩薩で、勢至菩薩は智慧の菩薩と言われています。

阿弥陀仏、観音菩薩と勢至菩薩を、阿弥陀三尊といいます。

仏教の慈悲は、全ての人に対して樂を与え、苦を取り除き、救い取るはたらきとされています。多くの仏像の仏さまの手を見ると、左手を肩まで上げて開いています。右手は平らにして膝の上で開いています。左手で苦を払い除き、右手で救い取るというお姿を示しています。抜苦与樂の姿といわれて、よく知られています。

一般に慈悲というと、目下の者に対してあわれみ、いつくしみ、なさけ、仁愛あるいは博愛などの気持ちの表現とはたらき、として用いられます。親鸞は、仏さまの衆生に行き届く慈悲とはどういうものかを説いています。

仏教の聖道門では、加持祈祷を主なつとめとしていますが、親鸞は、加持祈祷では本当の意味で、持続力のある、人々を救いとする力にはならないといっています。自力聖道門が一人ひとりの個別の救済にはなるだろう、しかし衆生全体に及ぶものにはならない、と考えたからです。

本願力は、すべての衆生を阿弥陀仏の慈悲の力で救うという願いです。凡人、特に老齢化してからは自分の思うようには慈悲のはたらきはできません。連れ合いを不憫に思っても身体は動きません。阿弥陀仏は、そういう人に慈悲のはたらきをさせようとしてくれる

のです。

親鸞は、阿弥陀仏の本願力が衆生に対して、慈悲のはたらきをするということです。浄土教の慈悲の思想は、『教行信証』で、少々難しい表現になりますが「往相還相二種回向」として説かれています。これをただ慈悲ということと区別して、大慈悲心といっています。

念仏の行者は、死後に、大宇宙空間の浄土へ往生していきます。これを「往相」といいます。浄土でさとりを開き仏になります。そして、再び現世の地上へ還って来ます。これを「還相」といいます。そして衆生の利益となる慈悲のはたらきをします。この阿弥陀仏の力により浄土に参り、地上に還るはたらきを「回向」といいます。死者を送る葬儀や故人の回忌法要などでは、必ず読経の最後に「回向文(*6)」が拝読されます。

このような阿弥陀仏の働きを「往相還相二種回向」あるいは「往還回向」というわけです。

ブツダは死後の世界を説かれなかったといわれていますが、浄土教では、三千大千世界の中に浄土の存在を説いています。これは、一見すると、仏法の枠組みから外れているように見えます。しかし親鸞は、浄土は、実体として死後の世界ではなく、ありとあらゆる

ものを浄化するほたらきをする空間とみています。ブツダの説かれた三法印である「諸行無常」「諸法無我」、そして「涅槃寂静」が浄土の世界を具体的に説かれたといっているのではないでしょうか。

仏教の唯識論を展開した思想家の天親菩薩の著書『浄土論』で、浄土とは、すべての事物・事象を浄める浄化作用のはたらきをしていると説いています。親鸞は、さらに『教行信証』の中で、浄土について、真仏土と化身土の二つの章で、詳しく記しています。

悪人正機説を説く親鸞は、『教行信証』に、一念をすることもない信心のない者（自力の作善の者）を救う浄土を化身土といい、信心のある念仏者（慚愧の心のある者）は、真仏土へ往生できると、記しています。もう少し親鸞の言葉を書き加えると、化身土の浄土は、疑城、胎宮あるいは懈慢界という浄土のほitoriにある世界と考えられています。いわば*仮の浄土で、あながち不幸なところだとは言えないようです。

* 「親鸞―『歎異抄』を手がかりとして」 伊藤益著 春秋社

第五条 山川草木 悉有仏性

大宇宙の空間と永遠の時間の流れ、その「大きな物語」の中に生きている自分を見つめてみましょう。生きているこの時を、過去へ、そして未来へ、無量の時間と空間を広げてみましょう。

禅の有名な公案に「父母未生以前の真面目を見よ」というのがあります。真面目（しんめんもく）というのは自分自身のことです。ですから「両親が生まれる前の自分を見よ」という課題です。両親が生まれる前に、自分が生まれているわけがないのです。「その自分を見よ」というのですから、まったく理屈に合わない設問なのです。私は、未だに、これにどう答えていいかわかりません。

親鸞が生きた時代は、武士が台頭して源平戦争、そして鎌倉幕府に移行する騒乱の時代でした。九歳で出家した親鸞が、両親のために孝養の供養をしなかったということを、文字通り受け止めては『歎異抄』に書かれていることの理解にはなりません。

仏教には「山川草木 悉有仏性」という言葉があります。自然のものにはすべてに仏性があるという教えです。「諸行無常」の解釈もそのような見方から理解しようとすると、この

世の空間や時間軸が、ぐっと広がってきます。要するに「相対的な観念や判断」を払い除いて解釈しなければならぬということです。

また、六道輪廻（*7）を転生する全ての生を浄土に救い取るという、本願の他力を信ずべきでしょう。宿業（*8）や諸々の迷いから解き放されていくでしょう。

人類は誕生以来、世々代々一つのファミリーという見方が「大きな物語」としてできると思っています。

第六条 阿弥陀仏の勅命

私が得度願を提出してご認可いただいた常陸太田市の正念寺には、毎月一回の聞信会に出席して前住職でした佐竹教信師（二〇一六年九十二歳で入滅）の法話を聴聞させていただきました。師の『歎異抄』の講話で、

念仏の行は「南無阿弥陀仏」と名号を称えることです。『教行信証』には、「南無」とは、「帰命」の意であり、さらに「帰命」は本願召喚の勅命であると、「敬う」あるいは「従う」

というような意味以上に強い、阿弥陀仏の本願力に服することである、と書かれています。つまり、名号を称えることは、師から導かれて行うものではなく、阿弥陀仏の勅命を聞き、素直に身に受け入れることだ、といわれるのです。

そして、仏教の信心というものは、自分の体験からしか得られないもので、毎日、朝晩お念仏を称えることが真の行ですと。

次のような甲斐和里子さんの和歌を紹介いただきました。

み仏をよぶわが声は

み仏のわれをよびます

み声なりけれ

「南無阿弥陀仏」と念仏を称えるとき、その声は、わが声ではなく、阿弥陀仏の発する「助けてやるぞ」という本願そのものの声にはかならない、といっています。自分の念仏が、弥陀の発する声となり聞こえてくるという「無我」の境地につながっていくのです。

第七条 念仏は無碍の一道なり

原文には「念仏者は」と書かれています。が、「念仏は」と読みます。古文書では漢字の下
の助詞の読み方をカナで振り仮名として書くからだという説です。したがってこの条の文
章は「念仏は、なにもものにも妨げられることのない大道です」という表現になります。

法然が『選択本願念仏集』を表し、浄土三部経の経文を引用して、聖道門より浄土門に
帰すべきこと、そして雑行を投げすてて、阿弥陀仏の本願を称名念仏する行に帰入すべき
ことを説かれました。これが、仏教を大衆に開放することになり、その後、浄土教は、燎
原の火のように、大衆に広がっていききました。

これに対して、聖道門の天台宗をはじめ奈良の興福寺などからは激しい非難と、朝廷か
らの弾圧がありました。

本条の「天神・地祇も敬服し、魔界、外道も障礙することなし」と、魔界、外道もまた
げにならないというのはともかくとして、天神・地祇を敬服することなしと、はっきりと
聖道門を否定しています。親鸞が、法然の『選択本願念仏集』を浄土宗の教義の原典とし
ていることを表明しているのがこの条です。

ただし、念仏者はけっして他宗派を論難、批判をしてはならないと、法然は厳しく訓戒をのこしています。『選択本願念仏集』の結びには、本書を高覧の後には、壁の底に埋めて窓の前に遣しておいてはならない、と書き添えています。

日本が国家神道に突き進んだ一時期を除いて、平和主義を維持できたのは、仏教とりわけ日本の仏教が排他的にならなかったからではないでしょうか。西欧や中東の戦争が、いまだに宗教戦争を繰り返しているのは不幸なことに思えてならないのです。

それでは「念仏は無碍の一道なり」という言葉を、現代語で書き改めると、

「念仏は、なにものにも妨げられることのない大道です」

妙好人の浅原才市は、

「腹が立ったら念仏もうせ 仏が火の手の水になる」と歌っています。

一念の念仏ということについて、その意義を考えてみたいと思います。

口称の念仏は、「無我」につながる諸法無我の思想の実践にほかならないと思います。念仏を称えているとき、煩惱のない無我と化しているからです。前条（六条）で書いたよう

に、「南無阿弥陀仏」と称えるとき、私たちは、「南無阿弥陀仏」という声を聞いているのです。それは、阿弥陀仏が発する声「助けてやる」という本願の声にほかならない、と考えられるからです。念仏は呪文ではなく、「大きな物語」を裏付けている阿弥陀仏の行為であると考えるのです。

天神・地祇などの神々との関わりはなく、どのような業報も感じることがない、と親鸞はいったということです。

「業報」というのは難しい言葉ですが、自業自得といいますが、自分のしたことは自分で引き受けていかなければならない、ということです。念仏のおかげで、そのことに心を動かされなくなります。「無碍の一道」にたどり着くまでには長い年月がかかるのだろう、と私は思います。

第八条 念仏は阿弥陀仏のおはたらき

法然が『選択本願念仏集』で主張した念仏行の一択は、念仏が浄土門の正行であり、その他の行は全て雑行と言い切っています。妨げられるものは何もない「念仏は無碍の一道」と、前条で強い言葉で述べています。そして念仏について、本条で繰り返し返しています。念仏行者の念仏は、第六条に書かれている阿弥陀仏の本願力によるものだから、自分の「はからい」によるものではないこと、このことを他力というわけです。

「非行・非善なり」とは、宗教的な修行を励むことがなくても、道徳的な善行につとめることがなくても、往生できるということです。念仏は、自力により悟りを開こうとする修行というようなものではなく、むしろ、本願力を信ずるところから生ずる行だからです。第十条でいう「念仏には無義をもつて義とす」と、すなわち、往生するのは、信心を正因とするとともに、帰しているのです。

第九条 娑婆の縁がつきたとき

この条は、『歎異抄』で最も味わい深いところです。

法然は『選択本願念仏集』で、「われらは命が終わったのちに浄土へ往き仏に成る」と、書かれています。いわゆる「臨終業成」の説と呼ばれています。平安時代末期の宇治の平等院の阿弥陀如来像にまつわる説話や阿弥陀三尊の山越え来迎図など、当時の人々が本当に信じていたことでした。

死後の世界のことだけでなく、死直前の死を迎えるときの意識、心の物語をシミュレーションしているのが、この条です。師の親鸞と門弟唯円の巧みな問答が読み取れます。

唯円が親鸞に、次のような問いかけをします。

「念仏を称えても、天に踊り、歓喜の心が湧いてまいりません。また、急いで浄土に参りたいという心持にもなれません。これは、いったいどのように考えればよいのでしょうか」と。

当時の仏教門徒で特に念仏行者は、浄土往生を乞い願ひ、ひたすら念仏していたことでしょう。唯円ほどの念仏者が、往生したい気持ちになれないということは、ありえないこ

とと推測されます。唯円は師の叱責を覚悟して右の問いを投げかけたのでしょう。この問いに親鸞は次のように答えます。

「この親鸞もまた、そのような不審をいだいていたのだが、唯円坊よ、お前さんも同じ心持だったのだな」

と、唯円を叱るどころか、かえって彼に同調します。しかし親鸞はいい加減な気持ちで返答しているわけではありません。次のように、唯円に訓戒をこめて同調する理由を説きます。

「浄土に行けるというのは、天に踊り地に踊るようなことではない。だが、喜べないからこそ、われらの往生は、なおいつそう確たるものになるのだ」

と、親鸞に言わせれば、私たちは例外なしに煩惱にとらわれている凡夫なのですから、阿弥陀仏の摂取不捨の対象なのだ、というわけです。煩惱にまみれた人間こそ、念仏により救われて行くにちがいない、と親鸞は、逆説を加味した言説で語っています。親鸞が、浄土真宗の開祖として厳しく頑なな理想論者ではなかったことを示しています。

さらに、続けて唯円に語ります。

「いそいで浄土に往生したいという気持ちになれないばかりか、ちょっとばかり病気にでもなろうものなら、死んでしまうのではないかと心細くなるのも、これもまた煩惱のなせるわざだ」

一休禅師は「死ぬるときがきたら、死ぬのがよからう」言ったそうですが、私たち凡人にはなかなかそのような境地に達することはできません。

私たち凡夫には、浄土に往生していくという確信と、往生すべくこの現世を捨てるという覚悟が十分にはないのです。親鸞はさらに言います。

「輪廻転生（*7）をへて、苦悩に満ちた故郷ともいうべき現世は、どうしても捨てきれずに、いまだ行ったことのない浄土を恋しく思うことが無いのは、よほど人間の煩惱が強いからにちがいない」

親鸞は『一念多念文意』で、煩惱とは、

「凡夫というは、わたしどもの身には無明煩惱が満ちみちて、欲望も多く、怒り、はらだ

ち、そねみ、ねたむ心多く、絶え間なく、臨終のそのときまで止まることなく、消えることもない」

と、人間の煩惱の強さを書いています。

そして次の一文は、いそいで浄土に参りたいという気持ちになれない者を、ことのほか憐みになっています。

「この娑婆の縁が尽き、力つき果てたとき、われらは、かの浄土へと往き生まれることになるのだ」

と、阿弥陀仏の無量寿と無量光の大慈悲心と大なる願心は、まことに頼もしいわけです。

三千大千世界の宇宙の中につつまれていく、六道を輪廻転生（*7）することなく、往生は、この世において、すでに決定していると思われます。それに気が付かない凡夫が、

「念仏して、浄土に行けると、天に踊り地に踊るように、喜ぶような人は、逆に煩惱のない人ではないかと首をかしげたくなる」

と、書かれています。法然が、念仏により、臨終後に浄土に参るという「臨終業成」を説かれましたが、親鸞は、この条で、まことに逆説的な言い方ではありますが、念仏即往

生の「平生業成」をいっています。

兼好法師の『徒然草』の第三十九段には、念仏者に対して次のようなことが書かれています。

ある人が法然に、

「念仏を称えているとき、睡魔におそわれ仏道修行をおろそかにしてしまうことがあるのですが、どうしたら、この問題が解決できるでしょうか」

と、たずねたら、

「目を覚ましているときに、念仏をとえなさい」

そして、

「死後に、往生できると思えば、きっと往生できるだろうし、往生できないと思えば無理だ。往生できるかどうか心配しながらでも、念仏を称えていれば、往生できる」

と、答えたそうです。とてもありがたいお言葉です、と。

法然の「他力本願」を衆生門徒に説明した一文です。

第二章 『歎異抄』 本文の後編

第二章『歎異抄』本文の後編

第十条 義なきをもつて義とす

本条は、後半の第十一条から第十八条の序文です。親鸞の語録（第一条から第九条）が親鸞の滅後に異なる解釈されている誤りを、『歎異抄』の著者唯円が、指摘して正しているのが後半の各条です。

この条の書き出しは、唯円が親鸞から聞いた言葉、「念仏には、無義をもつて義とす」です。

親鸞八十六歳のとき、門弟願智に書き送った手紙に記されていた言葉です。本書の著者唯円に送られた手紙ではなく、下野の国から京都に訪ねてきていて、親鸞入寂のときに枕辺に立ち会ったとされる願智あての手紙の写本として残されています。それだけに、親鸞の晩年の言葉として、この文章の重さと信憑性をうかがい知ることができます。

この文章を読み解いてみたいと思います。

法然が、『選択本願念仏集』で、浄土へ往生できる唯一の行であると示された「念仏」が、「義なきをもつて義とするもの」、というわけです。



「義」は儒教で説く、人のふみ行うべき道のことで、正義、義理とか恩義という言葉で使われます。江戸時代以降では、人の対し、交際上のいろいろな関係から、勤めなければならぬ行為やものごと、として使われてきています。「義理を欠く」、「義理を立てる」、「一緒に行けた義理ではない」あるいは「恩義に報いる」というような使われ方をします。

「*月さす指」のたとえば『般若経』の注釈書である龍樹の『大智度論』に書かれています。

親鸞が浄土門の第一祖とした龍樹が、「義なきをもつて義とす」のいわれを「月さす指」のたとえで説いています。

悟りへの道の先にあるのが月・真如の世界です。そこ

に至る道を示しているのが指です。指は、経典であり名号です。

図と共に説明します。

「義なき」の義というのは、語であり言葉です。

「義とす」の義は、ブツダが涅槃の時に示した法灯明・真如の世界です。

ですから、月さす指のたとえば、その言葉・経典をよりどころにしてはいけない、差している指を見るのではなく、指がさし示している先の月を見なさい、というのです。

「無義をもって義とす」とともに「無我をもって我とす」、このような表現は、仏教にはよく出てきます。『般若心経』の「色即是空（色すなわちこれ空）」「空即是色（空すなわちこれ色）」もそういう表現です。相反するものを、一方を否定して、否定していることを肯定する、「無我」とか「空」の世界の表現です。自分自身を無我にする、あるいは全ての事象「色」が「空」となる心境です。親鸞が八十六歳に至って表現できた、あるいは悟った世界・心境でしょう。

自分の意志と力による、自分にこだわった、目先の事だけを見ている限りは、絶対に分かってきません。それ以上の超越する力が有るのです。目には見えない大きな空間が存在

するのです。

念仏が、名号と光明の力を持っていることを、また本願他力を信ずる心があるかどうかを、問いているといえます。

*『歎異抄』を読む』本多静芳著 角川学芸出版社

煩惱具足の凡夫（*2）が、無常の世界に生きていることを歌った「残月」という歌謡曲があります。横井弘作詞で、一九七三年に島倉千代子が三十六歳のとき歌っています。なぜか私の心に残っています。次は、その一節です。

白く寂しい残月が、水の流れに揺れている

バカといわれて、義理だけは

守り続けた、続けたこの俺を

じっと見つめる、愛しい月だ

横井弘は、「あざみの歌」伊藤久雄、「哀愁列車」三橋美智也、「川は流れる」仲曾根美樹、「下町の太陽」倍賞千恵子など、世に歌い続けられている歌の歌詞も書いています。煩惱具足の凡夫のバカ者が守り続けた義理とは、そして守り続けることができる力はどこにあったのでしょうか。人生一〇〇年を生きる時代に、ふと思いついています。

第十一条 名号の不思議

名号「南無阿弥陀仏」を称え念仏する門徒たちに、

一．阿弥陀仏の本願力を信じて念仏をするのか、

二．称える名号の力を信じて念仏するのか、

と問い、二つの違いを説いて、門徒を惑わす輩がいるが、それは間違いで、一体のもの、ということが本条の主旨です。

本願他力の不思議を信じて、名号を称えれば、如来の“はからい”で浄土に往生できるのです、と繰り返し述べています。

この条に興味深いことが書かれています。往生していく浄土は、二か所に分かれています。この条は親鸞が、第六祖とした源信和尚が表した『往生要集』に、お浄土は「報土」と「化土」に分かれていますと示されていることを引用しています。

親鸞は『教行信証』の中で、「真仏土」と「化身土」二つの章に分けて、浄土について説かれています。

本願と名号の不思議を信じて念仏を称える者は、真仏土に往生できます。しかし、本願を頼むことなく自力の心で念仏するものや、迷いのあるものは、辺地・疑城の胎宮といわれる化身土に往生するでしょうと、示されています。

化身土に往生することを「辺地往生」ともいいます。化身土というのも浄土極楽の一部ですから、それほど居心地の悪いところではないようです。そこで、五〇〇年は留め置かれてから真仏土に往生できるといわれますから、念仏を称えることは、安心して往生できることになるのです。というような不思議な浄土の世界と大きな物語があることを説いています。

第十二条 本願に逢う喜び

六字の名号（南無阿弥陀仏）の念仏だけを称えていても、經典や解釈論などを読み、教祖の教えを学ばなければ、浄土往生はできない、というのは、全くの誤りです。と、唯円はきっぱりとっています。

私たちの日常の暮らしの中で、年齢と共に、人との別れや、自分の思うようにはならないことに直面することが多くなってまいります。そんな時に「大きな物語」の出番が来るのです。しかし「大きな物語」の話を聞いて、自分のこととして受け入れることは、なかなか難しいことです。常識から離れている「大きな物語」を理解できないことは、知識が足りないことと思ってしまう。現今のSNS時代では、だまされ易い話やニュースが氾濫していますからなおさらのことです。そういうときに、もつと勉強すれば、情報を得れば「不思議なこと」が分かってくるはずだ、という誘惑にかられてしまいます。いくら知識を増やしても「大きな物語」は自分のものにはなりません。そこで唯円は、

「親鸞が『教行信証』に書かれている七高僧からの教えによる、本願を信じて念仏を称えれば仏になる、ということ信じること以外に学問が必要であろうか、いや何も必要がな

いのです」

と、きっぱり言っています。浄土門の如来を信ずるという「易行」と、学問をして修行により仏教の真理を明らかにするという聖道門の「難行」について、そのいわれや、双方の主張を記しています。そしてまた、他を非難して排除するようなことはよくないこと、無益なことであることも記しています。

阿満利磨先生は『歎異抄』講義の本で、パスカルの『パンセ』を引用されています。

人間に、欲望は生きていくために欠かせないもので、決して否定するものではないのですが、邪欲となる三つの欲望があるといいます。一つ目は官能欲、二つ目は支配欲、三つ目は知識欲です。なぜ知識欲が邪欲となるかというと、本来、問うべき一番大事な自己を問わないことにあるということです。そして先生は「知識と信心は両立しません。仏教の知識をいくら積んでも本願を信ずるようになることはできません」と書かれています。

現代では、学問を誇り、知識を誇る人々が大変に多く、本願念仏も学問をすれば分かるはずだと誤解している人が少なくありません。こういう人こそ『歎異抄』を読んでほしいものです。

第二条で「親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひと（法然）の仰せをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり」

と、きっぱりと言い切っています。親鸞は、本願に出逢ったことを喜んでいるのです。

第十三条 煩惱具足の凡夫（*2）

本書前編の第三条「善人が往生をとげることができるのなら、ましてや、悪人が往生をとげるのは、当然のことだ」という悪人正機説について、誤った解釈をする門徒が出てきている、と唯円はいいます。そして、悪をおそれず、本願を誇り（本願ばかり）、わざと悪いことをして、それが往生するための行いとする輩がいるが、こういう者は往生することは出来ない、と述べています。

このことは、本願を疑うことであり、また、この世における善も悪も全て、過去の行いによる宿業であることを心得ていないことなのです、と親鸞の「宿業（*8）」論を取り上げています。

宿業という言葉で、諸悪を持つ煩惱具足の凡夫（*²）は、自己の思いのままにすぐに善人になれるほど単純なものではなく、「縁」というものによってどのような振る舞いをするかわからない存在なのだ、ということを示しています。ときには、自分では手の付けられない煩惱の深みを持つものである、という人間のありさまを表しています。

親鸞は、一つの小さな宿業の譬え話をしています。

「ウサギの毛、ヒツジの毛の先に付いた塵ほどの小さな罪であっても、過去の世における行いによらないものはない、と知るべきである」と。

小さな罪を、小さな善と置き換えてもいいのです。

小林一茶の句に

「やれ打つなハエが手をする足をする」

とありますが、現代でいえばペットや小さな虫に目を向ける、やさしい視線を感じます。

さて、次の親鸞と唯円の問答は、ぐっと人間の持つ宿業の深さを表しています。

あるとき、親鸞は、唯円に問いかけます

「唯円坊よ、わがいうことを信ずるか」

信じます、と答えると、

「それならば、私が言うことに背かないで、間違はなくそのとおりするだろうね」

と、重ねて問いかけます。唯円坊は、謹んで承諾しますと言います。親鸞は、

「では、まずもって千人殺してくれないか。そうすれば往生は確かなものになるだろう」

これには、さすがの弟子の唯円も、

「聖人の仰せではありますが、私のようなものには、人一人として殺すことなど出来るとは思えません」

「それでは、どうして親鸞のいうことに背かないなどと言ったのか」

と、親鸞は仰せになり、続けて、

「これで分かるであろう。どんなことでも自分の思い通りになるのなら、浄土往生するために千人の人を殺せと私が言ったときに、すぐに殺すことが出来るはずだ。けれども、思い通りに殺す縁がないから、一人も殺せないのである。自分の心が善いから殺さないわけではない。また、殺すつもりがなくても、百人あるいは千人の人を殺すこともあるだろう」と、親鸞は仰せになります。

このことは、人は心の善と悪で、往生できるかできないかと勝手に考えて、本願の不思議なはたらきによって人が救われていくことを知らないでいることについて、仰せになっているのです。

煩惱・極悪の凡夫のどんなつまらない人でも、阿弥陀仏の本願に出会わせていただいたことを誇りに思う、本願ぼこりというのは、そういうことをいうのでしよう。

ロシアとウクライナの戦争や中東のイスラエルとアラブ民族の戦争で、何万人という兵士や民間人が殺されています。千年を越える長い歴史の因縁と宿業の連鎖によって起っているものと思えません。為政者たちが、そういう過去の宿業を断ち切るか、自分たちの本願ぼこりのような心を脱却することに気付かない限り、この世界から戦争は無くないのではないのでしょうか。

第十四条 一念の念仏

この条では「念仏」のはたらきについて書いています。「南無阿弥陀仏」という名号を称える念仏の仏教用語的な表現をすれば御利益（ごりやく）について、一念の念仏で、八十億劫という、ありとあらゆる罪が減するということ、仏教の五逆・十悪の罪を減するということを知らしめるために、こういう大袈裟な表現がなされています。十回念ずれば、その十倍の効果があるというようなことは、ちよつと異常な表現です。

これについては唯円も

「私たちの信じていることは、まったく異なる」

と否定しています。

「如来の光明は常に照らされているから、一念の念仏でも称えて信心を賜れば、浄土往生は定まり、臨終のとき煩惱は転じて、悟りの世界に入ることができるのです。ですから、一念の後の念仏は、往生できることの如来への報恩の念仏でしょう、罪や悪を減することを願う念仏であれば、それは自力の念仏です。他力を信ずる念仏ではありません」と、唯円はっています。

法然が『選択本願念仏集』を関白九条兼実の要請で書きます。親鸞など直近な弟子たちに写本を許しますが、誤解を招きやすい危険な本だから、読み終わったら壁に埋めてほしいと、法然は言われました。

法然や親鸞が、念仏の教えが一般大衆に受け入れられ、危惧したことは、その後の歴史上の出来事や変革を見ると明らかです。

一向宗は親鸞が開いた浄土真宗の古い呼び方です。親鸞は、念仏を唱えながら阿弥陀仏の救いを信じて極楽浄土を目指すことを説き、そのわかりやすい教えが、武家や商人、農民などの幅広い層に広まりました。一四八八年に加賀国（現在の石川県）で起きた「加賀一向一揆」は大規模でした。一揆勢が守護大名「富樫政親」を滅ぼし、その後、この地では約一〇〇年間にわたり、信徒による自治が続いたのです。

一四九六年、大坂に初めて城を築いたのは、浄土真宗本願寺派中興の祖といわれる蓮如（*4）です。そのころ浄土真宗には蓮如の功績で多くの門徒が集まり、一向宗として名高い結束集団に成長していました。蓮如の浄土真宗は戦国大名と肩を並べるほどの力を持ち、大坂は寺内町として隆盛を誇っていました。当時の石山本願寺は堀、石垣、土塁、塀をめ

ぐらせ、城そのものだったようです。蓮如の死からおおよそ七〇年後の一五七〇年、蓮如の曾孫にあたる顕如は、一向宗に圧迫を与えるようになっていた織田信長と交戦状態に入ります。それは十一年におおよそ長い戦に発展しました。一五八〇年、ついに信長との和睦に応じた顕如と一向宗徒はこの地を去りました。浄土真宗本願寺派の本山は、当初京都東山に創建され、その後各地に寺基を移しましたが、一五九一年豊臣秀吉より寺地寄進を受けて京都市の現在地へ移りました。また徳川家康は、何度も危機を切り抜けて天下を手に入れましたが、なかでも一五六三年に起きた「三河一向一揆」は、徳川家康の三大危機に数えられる出来事でした。

親鸞が浄土真宗の教えが正しく理解されずに広まることの危惧を、唯円が『歎異抄』に書き留めています。この条は、特に本願他力による念仏と、本願を信ずることなく罪を滅しようとする自力による念仏とを厳しく言い分けています。

阿弥陀仏の摂取不捨の力は全ての人を残し漏らさず救いとる、ということを信ずるといふことが本願他力の念仏です。念仏するたびに自分の罪が消え去ると信じるのは、それこ

そ自分の力で罪を消し去って浄土に往生しようとする自力念仏にほかなりません。

阿弥陀仏が、本願を誓われてから、既に十劫という長い時間を経ているのですから、八十億劫の人を救ってきたという阿弥陀仏如来の本願の力がいかに大きなものかを知っているもので、言い過ぎとはいえないのです。

第十五条 浄土の彼岸

煩惱だらけの凡夫（*2）が、この世で悟りをひらくということ、阿弥陀仏の本願力を信じて念仏を称えれば、即身往生できるということを、はつきりと否定しています。

唯円は、即身往生について、この世でこの身のまま仏になるという即身成仏は、次の二つの道だ、と述べています。真言密教の三密業といわれる、身口意の三密の行を完成した修行者の得られる境地であること。また、法華経の六根清浄といわれる、身口意のはたらしにおいて、あやまちを離れ、全ての衆生を悟りに導こうとする慈悲の誓願をおこすこと。この二つであると示しています。これは難行道の修行者で、仏道を修行するための優れた

性質や能力と、極めて強い善根をもつ者に可能なことといわれます。

これに対して、煩惱だらけの凡夫が、本願他力を信ずる心が定まったとき、本願のはたらきにより、次の世に浄土で悟りを開くことができるというのが、易行浄土門の教えです。浄土門は、善人と悪人を分け隔てしない教えであること、臨終に至るまで煩惱を断つことができない凡夫を救う教えです。親鸞は『教行信証』の序文に、

「難思の弘誓は難度海を度する大船、無碍の光明は無明の闇を破する恵日なり」

と、書かれています。弘誓とは、阿弥陀仏（弥陀）が誓われて成就された四十八の願のことです。

本書で唯円は、

「弥陀の願船に乗じて、生死の苦海をわたり、報土の岸につきぬるものならば、煩惱の黒雲はやく晴れ、法性の覚月すみやかにあらわれて、尽十方の無碍の光明に一味にして、一切の衆生を利益せんときにこそ、さとりにては候へ」

と、大乘仏教の真髓が示されています。報土の岸は、浄土の彼岸のことです。

この世で自力により悟りをひらくといっている人は、ブツダのように人々を救うために

さまざまな姿で現れ、仏にそなわる白毫相など三十二相といわれるような多くの優れた特徴を持ち、大慈悲心をそなえ、教えを説いて衆生を救うことができる人でしょいか、このような、そなえのある人こそ、自力の修行により悟りをひらいたといえるでしょう。しかし、そんな人は、この世にはいないでしょう、と、唯円はいいいます。

親鸞は、決して破られることのない信心が定まるとき、阿弥陀仏の慈悲の光明に攝取され、つねに護られて、もはや、六道輪廻の迷いの世界（*7）、宿業（*8）の世界にもどることとは、ない、生まれ変わることがない、といっています。

このことを現世での悟りが得られるというのは間違いです、と唯円はいつています。

「易行道である往生浄土の教えでは、この世において阿弥陀仏の本願を信じ、浄土に往生した後、彼岸で悟りを開くのであると、法然聖人から教えていただきました」と、今は亡き親鸞聖人のお言葉でした、と唯円はこの条を結んでいます。

第十六条 回心

本願を信じて念仏する人は、ふとしたことで腹を立てたり、悪いことをしてしまったたり、また信者同士でも口論したなら、そのたびに回心して、悪い心を改めなければならない、ということ、について。

「回心（えしん）」というのは、宗教の用語で、宗教的な体験として一般的にも使われている用語です。キリスト教で回心（かいしん）は、神に背いている自らの罪を認めて、神に立ち返る個人的な信仰体験のことをいっています。

唯円は、ここで「回心」とは、はじめて阿弥陀仏の本願力の智慧をたまわることという、書かれています。これを「悪人正機説」を悪用・乱用して、本条の最初に書かれているような、悪いことをしては、回心して、往生をとげるなどということは、ことのほかだ、と言っています。また、人の命は儚く短いものだから、回心することもなく、心安らかで、落ち着いた思いにも至らずに、往生するというのは、摂取不捨の誓願が、全く虚しいものになってしまうこと、本願を疑い、他力を頼む心がけのない人は、浄土辺地に往生することになることを、最も嘆いています。

信心が定まれば、往生は如来の「はからい」にお任せすることです。その本願のはたらきを受けて、おのずと心安らかで落ち着いた心も起こるでしょう。本願を信じ、迷いがなくなる、念仏も口をついて出てまいります。

自分の「はからい」をまじえないことを、「おのずとそうなる」というのです。そして、「ただ、ほれぼれ」と、思いたくのがよい、と唯円はいいいます。

これはすなわち阿弥陀仏の本願のはたらきなのです。それなのに、「おのずとそうなる」ことを信ずることができずに、この本願のはたらき他に、何かあるかのように、物知り顔にして言う人がいるようです。「悪人正機説」の深い意味を理解していないことを、唯円は嘆いています。

第十七条 愚者になって往生する

前条で、浄土の辺地に往生する人のことが書かれていますが、この辺地往生をとげる人は、いずれ地獄に落ちていくだろうということ、このいわれは、何の証文もありません。このようなことを言う人は学者ぶっているだけで、何も経論などを読んでいない、情けないことです。「辺地往生」については、第十一条に源信和尚の『往生要集』と親鸞の『教行信証』からの引用を示しています。

親鸞は、八十六歳のとき、法然から「浄土宗の人は愚者になりて往生する」と聞いたと、関東にいる門弟への手紙で書き送っています。本願を疑う学者ぶった生き方を捨てて、ありのままの自分に還れという意味なのではないでしょうか。

阿弥陀仏の「大きな物語」を受け入れていくためには、現世を超えた浄土に関心をもつことです。なかなか自分というのは自我が捨てきれません。死後の靈魂を信ずる人は、今をどのように生きるか、死後のことが心配でなりません。

仏教学者の鈴木大拙は、法然の言葉「愚者になりて往生す」を引用して、「学問とか知識や才覚という、がらくたがあると、それは信仰の道に進むものの障害にな

る」と、書かれています。

阿満利磨は『歎異抄講義』の本に、何故に『無量寿経』の中に、「浄土の辺地に往生する」ということが書かれているかということについて、その主な理由は、

「私たちが阿弥陀仏の本願を素直に信じることができないからです」

と、書かれています。迷いのある人でも往生できる浄土（化身土 58 頁）です。

『無量寿経』の最後に、ブツダがこの経法を説かれたとき、三千大千世界の菩薩衆、無量の衆生が歓喜しないものはなかった、と結ばれています。

第十八条 ブツダの三身

仏事で、お布施の多少によって、往生したときに大きな仏になったり、小さな仏になったりするというようなこと、まったく言語道断で、道理に合わないことです。

『歎異抄』を読んでまいりましたが、最後の条は、ブツダの教えの中で最も大事だとされている六波羅蜜（パラミータ）第一の「布施」についてです。布施の大小を問題にするの

ではなく、本願を信ずるか信じないかが問題だということを強調しています。

本条に「法性の悟りをひらいて」という記述があります。法性は、真理あるいは「如」という字が当てられます。法性は、究極の真理であり、色も形ありません。私たちの目には見えない、色もない形もない究極の真理の存在を、私たちは認識できません。

ブッダは、真理に目覚めよ、ということを読説してきました。同時にそれを説くブッダとう人物への信仰心も起こりました。ブッダが入滅すると、ブッダの説いた真理だけを頼りに生きていこう、ということになりますから、弟子たちは、ブッダの人格を通して真理につながる道を、自分たちの仏教の道だ、と理解するようになりました。

仏教での究極の真理は、「法」と言います。「法」はダルマ、真理の意味です。そこで、ブッダの人格を通しての真理ということを示すため、ブッダは「法身」となりました。「法身」は真理そのものですから、色も形ありません。「法」が人格化されて「法身」となると、「身」が付いているので、人間には真理に近づきやすいイメージになります。従ってブッダは「法身」と呼ばれ、真理の存在となったわけです。

この真理の世界の中に、ブツダは、「大きな物語」を創り出していたのです。

「法身」は、色もなく形もなく人の目には見ることが出来ません。そこで、真理の世界、すなわち「如」の世界から阿弥陀仏という、「方便報身」が現れるのです。「如」の世界から来られた「如来」といわれます。方便というのは、手段という意味です。「方便」は単なる手段という意味ではなく、私たちにとって絶対唯一の手段ということです。一人ひとりにぴったりと合う手段です。「方便報身」であるということは、人間が真理とつながることが出来る唯一の手段が阿弥陀仏となります。阿弥陀如来とよばれます。

それでは、この世界に実在されたブツダは、なんと呼ばれるのでしょうか。大乘仏教の中で、この世に現れたブツダは「応身」と呼ばれています。大乘仏教では「法身」「報身」「応身」をブツダの三身として、諸説が立てられています。

大乘仏教の經典はブツダの死後六百年後ぐらいに整備されます。經典では、話者はすべて歴史的なブツダとされています。弟子たちがブツダの説いた物語を聞いたこととして書かれています。『無量寿經』の法蔵菩薩の物語は、「方便報身」を生み出すための物語です。

私たちは、死ねば色も形もない「無上仏」という法身になります。そして、浄土で阿弥

陀仏のはたらきにより、私たちは死ねば「法身」になりますが、同時に「方便報身」になり、人々を救う活動に参加します。これが、第四条に書かれている往還回向のはたらきです。

後序 信じる心

「信心」という言葉は、今や古語のようになってしまっています。しかし、「信じる心」というのは人生で、最も大切な言葉だと、私は思っています。「信なくば立たず」というような、人との信頼関係の厚いことが、よい人間関係であり、そういう人たちの生活や事業は、必ず幸福であり、成功し継続していくものと思っています。

「大きな物語」の世界で、信心とは「真理の世界の如来からたまわる信心」のことです。本書の結文として、唯円は、信心について、親鸞の三つの言葉を記しています。

今だ、宗教とか信仰ということが、人々には理解されていない時代に書かれたことですから、ここで、あらためて「信心」という言葉を味わってみたいと思います。

(一) 第一は、親鸞が法然の浄土門に入門して四年後のころ、

「法然の如来からたまわる信心と、親鸞が如来からたまわる信心とは、同じものである」という主張をしています。これには法然の長年の直弟子から猛烈な反論が出ます。それに決着をつけるため、法然にたずねることにいたるのですが、これに対して、法然は、

「自分の信心も親鸞の信心も、念仏によって如来よりたまわったという点で同じだ」

と、答えたということです。日本での浄土門の揺籃期に、本願を信じることに、煩惱の強弱や生き方の相違により、信心が異なるとするのは、ある意味で当然だったと思われる。

「往生のための信心においては、全く異なることはない、ただ一つだ」と親鸞は述べています。親鸞は、このときすでに、法然の説く浄土門の聖教を深く理解していたことを示しています。

法然が、比叡山の西塔黒谷を下りて、天台宗門から浄土門に回心したのは、一一七五年の四十三歳の時といわれ、一一九八年の六十六歳の時『選択本願念仏集』を書いています。

そしてこの年には関白九条兼実に授戒をしています。それだけ法然の教えは、比叡山天台宗門よりも、当時の朝廷のトップまで理解が得られ信頼されていたのです。親鸞が、法然

の浄土門に入門したのは一二〇一年、親鸞二十九歳で、法然六十九歳の時です。

親鸞の「信心において、法然の信心も自分の信心も同じである」という主張に、理解を示さなかった法然の直弟子には、誓観房という『平家物語』に出てくる平重盛の四男や、『平家物語』の作者藤原行長の弟の念仏房などがいたと伝えられています。元々天台宗の人であったので、「行」を中途半端な心で行しても効果がないという立場にいたのでしょうか。阿弥陀仏から人間に与えられた「行」というよりは、自分が努力して行じなければならぬという意識の方が恐らく強かったのではないのでしょうか。ですから、煩惱具足の凡夫の念仏という、衆生を救うといわれる念仏よりも、自分の気持ちを清らかにして念仏をしないと、念仏をしたことにならない、と考えるのも無理からぬことなのでしょう。

(二) 信心について二つ目は、「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり」

この言葉は『歎異抄』の目玉ですと、阿満利磨著『「歎異抄」講義』で語られています。しかし、最も理解することが難しいところです。

「弥陀の五劫思惟の願」は阿弥陀仏の四十八願中の十八願のことです。「よくよく案ずれば」

と書かれています。私たち凡夫には、なかなか理解できません。阿満先生は、仏意というのは、自分の身を通じて思いめぐらして考えていくと分かってくるもので、学問的な知識として関心を持ち研究しても、仏意の真実に出遇うことはできない、かえって邪魔をするだけだ、と仰っています。

どうして「ひとへに親鸞一人がためなりけり」と思うことができたのでしょうか。この文章の次に親鸞は、「それほどの業を持ち受ける身」といわれ、

「自分は、それほどに重い罪とたくさんの業・宿業を背負う身である。それを思うと、絶望しかないが、阿弥陀仏が、そういう自分を助けようと思つて、本願が出来ることがわかる」と、本願の有難さが身にしみる」

と、唯円は常々聞いていたと書かれています。原文では「本願のかたじけなさよ」と書かれていて、親鸞は感謝し詠嘆しておられます。

このことは、善導大師の「わが身は六道の輪廻転生を抜け出すことができない凡夫であることを知れ」という言葉に、親鸞の思いは一致しています。親鸞が、わが身を持つて話されたことは、私たちが、わが身の罪惡の深さを知らず、如来のご恩がどれほど高く尊い

ものかも知らずにいる、そのように迷いの世界に沈んでいることを気付かせるためであったのです、と唯円は書いています。

また、阿満先生は次のように講義されています。「親鸞一人がためなりけり」は、第十八願の中で「十方衆生」という如来の呼びかけと対応した言葉です。經典では、我が名を呼べば全ての人を救うという呼びかける時、「十方衆生」といいます。その「十方衆生」という呼びかけに応じて、親鸞は「親鸞一人がため」というのでしよう。親鸞一人が救われるということは、「十方衆生」が救われるのですよ、と親鸞はいいたいのです。

(三) 信心について、三つ目は、「念仏だけが真実なのだ」という言葉について、

親鸞は、「何が善であり、何が悪であるか、そのどちらも私は知りません」

そして、「念仏だけが真実なのだ」といわれています。

この場合の、善や悪は世間の道徳ではなく、仏教の教える善や悪です。何故に、親鸞は、「何が善であり、何が悪であるか、そのどちらも私は知りません」といわれるのでしょうか。これも大変に理解することが難しいところです。

まず『歎異抄』の原文で、次の文章を理解しなければなりません。

「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもつてそらごとたはごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておはします」

この文章を次の三つに分けると理解しやすいと、阿満利磨先生は講義されています。

一つ「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界」・・・無常の世界の凡夫

二つ「よろづのこと、みなもつてそらごとたはごと、まことあることなき」

・・・世間虚仮

三つ「ただ念仏のみぞまことにておはします」・・・念仏のみぞまこと

この三つの言葉の中で、最も肝要なことは、二つ目の「よろづのこと、みなもつてそらごとたはごと、まことあることなき」で、これは聖徳太子の「世間虚仮、唯仏是信」という言葉の「世間虚仮」の認識です。「唯仏是信」は「念仏のみぞまこと」に通じています。これだけではニヒリズム（虚無主義）に陥ることになりますが、聖徳太子が立派に国政をつとめられたのは、仏の教えがニヒリズムを越える道であることを示されたからです。

そのところに気付くために、一つ目の「無常の世界の凡夫」であると自分自身を見つめ直す必要があるのです。二つ目の「世間虚仮」の中に生きているのが、自分自身である

という事実にあづくことです。その上で三つ目の「念仏のみぞまこと」ということを領解できれば、そういう事実の上に立って、二つ目の「世間虚仮」の中に生きて行く力が、獲得できる、というのです。その力が得られたとき、ニヒリズムを克服していけることになるのです、と阿満利磨先生は解説されています。

仏教で、「泥中の蓮」というのは、泥中に生じていても自体は泥に汚されず、清浄である蓮華は、煩惱から解脱して、清浄であり続ける姿を示しているといわれます。

三つ目の「念仏のみぞまこと」が領解されると、一つ目も二つ目も受け止めることができます。仏教における「救い」は、不幸な状況が除かれるとか、辛いことが転換されて無くなるとか、そういうことではないのです。現実に起きていることを、そのまま、たじろがずに受け止められるようになることなのです。つらい病氣や孤独感を受け止めることができる、心の転換が起きることです。とても難しいことですが、この矛盾に満ちた「世間虚仮」の世界も、そのまま受け止め、そして、その矛盾や苦しみを越えていこうとする努力のあり方が、仏教における「救い」になります。

親鸞は、当時の仏教が教えていた善惡の道が、実質をもたないことに気付き、その上で、

阿弥陀仏の「大きな物語」が、一番大事だと仰っているのです。

「大きな物語」では、「念仏」を称えるときに、阿弥陀仏が私たちの中に存在します。そして信心とよばれる「まことの心」がはたらくのです。ですから親鸞は、「ただ念仏のみぞまことにておはします」と仰るのでしよう。

流罪記録 唯円著

後鳥羽上皇の御治世のころ一二〇七年（承元元年）法然聖人は他力本願念仏の一宗を興し、世に広められた。そのとき興福寺の僧たちが、仏の教えに背くものであるとして朝廷に訴えた。そして法然聖人の弟子のなかに無法な振舞いがあったという根も葉もないうわさによって、処罰された人々は次の通りである。承元の法難といわれている。

法然聖人、およびその弟子七人は流罪となり、また、弟子の四人は死罪に処せられた。

法然聖人は、土佐の国の幡多というところに流罪となり、罪人の名として藤井元彦、男性などがあり、年齢は七十六歳であった。

親鸞は、越後の国に流罪となり、罪人の名としては藤井善信などがあり、年齢は三十五歳であった。（中略）流罪になったのは、全八人であった。

死罪に処せられたのは、善綽房西意、性願房、住蓮房、安樂房の四人であった。

これらの刑は、二位の法印尊長の裁定である。

親鸞は、流罪になったとき、僧籍を取り上げられて俗名を与えられた。そこで、僧侶でもなく俗人でもない身となったのである。これにより、禿の字を自分の姓として、朝廷に

申し出でて認められた。その書状が今も外記庁に納められているという。

このようなわけで流罪の後は、自分の名前を愚禿親鸞とお書きになるのである。

この『歎異抄』は、わが浄土真宗にとって大切な聖教である。仏の教えを聞く機縁が熟していないものには、安易にこの書を見せてはならない。

釈 蓮如（*₄）（花押）

注 釈

*1 親 鸞

親鸞（一一七三—一二六三）は浄土真宗の開祖です。藤原氏一族である日野有範の長男として生まれ、名は忠範と名付けられました。誕生地は京都市伏見区の日野の里であったといわれています。そこには日野氏の氏寺である法界寺があります。『御伝鈔』覚如著によれば、九歳の時に青蓮院の慈円の門に入り出家し、範宴（はんねい）と名乗りました。以後二十年間、比叡山で修学し、常行三昧堂の堂僧などをつとめました。

建仁元年（一一〇一）二十九歳の時、比叡山での修行では悟りを得ることが出来ないと苦悶の末、比叡山を下りました。京都・六角堂に百日間参籠に入られます。お籠りの九十五日目に、観音菩薩の夢告により法然を訪ね、法然の門弟となりました。そのとき、綽空（しゃくくう）という名をいただいたとされています。

元久二年（一二〇五）には、法然著『選択本願念仏集』の書写を許されました。そのとき綽空は善信（ぜんしん）という法名を与えられます。また、法然の真影を描くことも許されたとき、名を綽空から親鸞と改めたとされています。

そして、法然のもとで学ぶ間に恵信尼と結婚したとみられています。

承元元年（一二〇七）念仏弾圧（承元の法難）によって、法然らとともに処罰され、流罪となって越後の国府（現在の新潟県上越市）に流され、還俗のうえ、名を藤井善信（よしざね）と俗名が与えられました。そして自らを非僧非俗と位置づけ、愚禿親鸞と称しました。

建暦元年（一二一一）赦免されると、あらためてご自身を善信房親鸞と名のられています。建保二年（一二二四）妻子とともに関東に移住しました。常陸国稲田（現在の茨城県笠間市稲田）を中心に伝道の生活を送る一方、元和元年（一二二四）親鸞五十二歳のとき、浄土真宗の根本聖典である『教行信証』の著述を完成しています。この年が浄土真宗の立教開宗の年とされています。

六十二、三歳の頃、京都に帰ると、御消息（お手紙）によって関東の門弟を教化するとともに、「三帖和讃」をはじめ多くの著述を残しました。建長初年の頃から、関東で法義理解の混乱が生じ、長男善鸞を遣わしましたが、かえって異義を生じ、建長八年（一二五六）、善鸞を義絶しました。

弘長二年（一二六二）十一月二十八日、弟尋有の坊舎で九十年の生涯を終えました。新暦

の一二六三年一月十六日にあたるので、没年を一二六三年と表示しています。

その撰述は、主著『顕浄土真実教行証文類（教行信証）』のほか、三帖和讃とよばれる『浄土和讃』『高僧和讃』『正像末和讃』などほか数多くを残されています。

なお、明治九年（一八七六）に見真大師と諡（おくりな）されています。

*² 煩惱（ぼんのう） 具足の凡夫

煩惱とは、心身をわずらわし悩ませ、正しい判断をさまたげる心のはたらきをいいます。仏教では貪欲、怒り、無知を煩惱の三毒といいます。親鸞は、人はみな「煩惱具足の凡夫」だといいます。親鸞著『一念多念文意』で、

「凡夫というのは、わたしどもの身には無明煩惱が満ちみちて、欲望も多く、怒りや腹立ちやそねみやねたみの心ばかりが絶え間なく起こり、まさに命の終わろうとするそのときまで、止まることもなく、絶えることもない、水火二河の白道のたとえに示されている通りである。」

煩惱は、命が終わろうとする臨終のまぎわまで、離れないものだ、と書かれています。

* 3 本願 第十八願

法蔵菩薩が阿弥陀仏となり成仏する前に誓った誓願である四十八の願のうち第十八願が本願とよばれています。三蔵康僧鎧による漢訳『無量寿經』の原文は次のとおりです。

設我得仏十方衆生 至心信樂欲生我國 乃至十念若不生者不取正覺 唯除五逆誹謗正法
『浄土真宗聖典（注釈版）』十八頁の、漢語読み下し文は次のとおりです。

たとひ仏を得たらんに、十方の衆生、至心信樂してわが国に生ぜん^{おも}と欲ひて、
乃至十念せん。もし生ぜずは、正覺を取らじ。ただ五逆と誹謗正法とをば除く^{のぞ}。

* 4
蓮如

蓮如（一四一五～一四九九）本願寺第八代宗主。第七代宗主存如上人の長子。十七歳の時、青蓮院の尊応のもとで得度し、父に真宗教義を学び、近江、北陸の教化を助け、東国の親鸞聖人の遺蹟を巡拝した。一四五七年四十三歳で本願寺を継いで近江の教化を進めたが、一四六五年延暦寺衆徒の本願寺破却によって河内、近江等に移った。一四七一年、越前吉崎に坊舎を建て、御文章等による独創的な伝道を展開し、北陸を主軸に東海・奥州に教線を広められた。一四七四年頃から加賀において領主、在地武士などの擾乱が絶えず、本願寺門徒の一部もその渦中に陥るようなこともあって、翌一四七五年、吉崎を退去された。その後摂津、河内、和泉に布教し、同一四八一年、山城国山科に御影堂、阿弥陀堂を建てて本願寺の再興をなしとげられ、一四八九年に隠居された。親鸞聖人、覚如上人、存覚上人の教説をうけて直截で明解な文体の御文章や法語をもって伝道につとめ、今の本願寺教団の基盤をつくり、本願寺教団中興の祖と仰がれている。著述に『御文章』『正信偈大意』などがある。

『歎異抄』本願寺出版社より

* 5 慚愧（ざんぎ）

キリスト教の教会に行くと懺悔（ざんげ）室というのがあります。懺悔というのは、神の前で自分の犯した罪を告白し悔い改めることをいいます。懺悔という言葉は仏教ではあまり出てきませんが、仏教では「慚愧（ざんぎ）」という言葉が使われます。ブッダが死の直前に説法したという仏典『涅槃経』に書かれています。

「二つの白法があり、衆生を救う。一つは慚（ざん）、二つは愧（ぎ）なり」と。

「慚」という漢字は立心偏の心に斬るという文字で出来ています。自分の心の悪を斬るのです。これがなかなか難しい。またそのような機会のない人生は平和であり穏やかです。

「愧」は立心偏に鬼という文字で出来ています。自分の心の鬼は、我を是として、他を非として責めるのです。自分の中に鬼を見ることがない人は幸せです。よい人たちに囲まれています。感謝する人生を送ることができます。

慚愧の心は、恥を知るといってもあります。恥を知るとは美德なのです。

そのときに、もう一人の自分が客観的に見えてきます。自分自身を見守る、もう一つのまなざしです。そして相手の立場を理解できる生き方ができます。慚愧の心は仏さまから

賜るものです。『涅槃經』で白法といわれる由縁もそこにあります。

*『慚愧、よく衆生を救う』藤田徹文著 本願寺出版社

* 6 回向文（えこうぶん）

「回向」の意味は、阿弥陀仏が本願力をもって、その功德を衆生にふりむけることをい
い、往相回向と還相回向の二種があるとされています。

回向文は、善導大師『観経疏』中の帰三宝偈の終わりの四句からとられています。

「願以此功德 平等施一切 同発菩提心 往生安樂国」

法要などで読経の終わりのご文です。意識勤行では、次のように読経されます。

「ほとけのみ名を 聞きひらき こよなき信を めぐまれて

よろこぶこころ身に得れば さとりかならず さだまらん」

* 7 六道輪廻の迷いの世界

輪廻（りんね）というのは、生あるものが生と死を繰り返すということで、六道は、地獄道―餓鬼道―畜生道―修羅道―人道―天道の六つをいいます。そして全ての生命のある存在は、ときに人間であり、ときに獣、そしてあるときは地獄に落ち、また天界に生まれることがあるという、インド人は古代から、この輪廻転生の思想を信じてきました。

〈参考『久保寛彦著作集』『生まれ変わる』を参照〉

この思想は、日本には仏教とともに伝来されたと考えられます。

ブッダが仏教の教えを説く以前からいい伝えられていた、インド人の基本思想のようなものです。日本でも、仏教が伝来する以前から、神道が形成される過程で、人が死ねば霊界へ行つて、定期的に現世の世界に戻ってくるという思想があります。こちら側はきちんとお迎えして、飲食を共にしてもてなし、一緒に時を過ごしたのち、また送り出す、このような営みの起源はかなり古くからあると考えられています。例えばお盆の行事などです。人間の靈魂は肉体が死ぬと別な形で生まれ変わるといふことが信じられていました。死んだあと、次に生まれ変わる間を中有（ちゅうう）または中陰（ちゅういん）といい、こ

の間は最大四十九日といわれます。葬儀で死の旅路の準備をして、四十九日法要といわれるも、この思想にもとづいています。

死後の世界を霊界という概念が古今東西にあります。霊的であることをスピリチュアルといえます。スピリチュアルに関心の有る人は、カルト(反社会的な宗教団体)から勧誘や不安を煽る教え込みで「彼らの世界」に引きこまれないように注意が必要です。

仏教では、この六道輪廻の世界を人間が生死を繰り返す迷いの世界であるとしています。この輪廻転生の迷いの世界から抜け出すことを解脱する、悟りを開くこと、と説かれています。親鸞が、比叡山で九歳の時に出家して、修行したのもこの解脱を求めたからでした。しかし親鸞は、二十九歳まで二十年間の修行で悟りが得られず、比叡山を下り、輪廻転生から抜け出して、浄土に生まれる往生の道を求めます。これを、親鸞は「生死出づべき道を求めて」(付録101頁)、としています。

浄土門の教えは、阿弥陀仏の誓願された本願の力で、死後は往生して極楽浄土に救い取られてまいます。浄土で成仏して、再び現世の地上へ還って来て慈悲のはたらきをする、往還回向を説いています。(第四条 37 頁を参照)

* 8 宿 業（しゅくごう）

宿業という言葉は親鸞の著書『教行信証』には記されていません。一般的に仏教の「業」思想として、身口意の三つのはたらきと、その結果もたらされる潜在的な力をさします。そして過去の生存中になされた善悪の行為の現在に及ぶ潜在的な力を、特に宿業と呼びます。

仏教の原理では「因・縁・果」により、私たちの生きている現在が存在しているとしています。物事には原因だけでなく、周囲には必ずそうした原因を生む間接的な原因、つまり「縁」があります。「因」は直接的原因で、「縁」は間接的な原因です。私たちは、この間接的な原因「縁」には、なかなか気付かないものです。気付かないけれども悪い縁にならないように、善となる縁になるように気配りしている日常があるのではないのでしょうか。そして、「因・縁・果」により、善い果に導かれる人生も、当然あるでしょう。

仏教の教えは、この「因・縁・果」の世界を無常といい、「因・縁・果」の世界から抜け出すこと、宿業の縁を切ることを解脱といって悟りの世界としています。

私たちは自分という自我の意識の世界で生きています。自我というのは、「因・縁・果」

に縛られた極めて妄想に近い、自分だけの極めて狭い世界なのです。

「宿業の身」ということを自分の身に受け入れて、自分自身の悪行や不幸なこと、病や老などを「宿業の身」として自分自身の現在を委ねてしまうとき、希望や新たに生きていく勇気が失われてしまいます。

自然にまかせる、阿弥陀仏の本願を信ずるときに、生きる力が戻ってくるはずです。そこから新しいエネルギーが生まれてくるのです。

現実が切羽詰まったものになったとき、「大きな物語」に出遇うことがあれば、その現実を受け入れることが出来るでしょう。しかし日常を自己中心的に、自我に対する疑いを持たずに生きている人には、「大きな物語」に気付き、「大きな物語」を自分のものにすることは難しいことになります。

人は、「因・縁・果」の中で生きていき、うまく乗り越えたり、躓いたりしたりする人生を歩んでいくものです。その人生で、自分の思うように出来ずに悩み、愛するものを失う不幸を重ねるのが人生です。また、病やケガなどの障害に際悩ませられるのも人生です。そのようなときに「大きな物語」に出逢い、「因・縁・果」の束縛から抜け出すことです。

付 録

人生は四苦八苦 生死出づべき道を求めて

付録 人生は四苦八苦 生死出づべき道を求めて

「生死出づべき道」というのは、親鸞が二十九歳のとき二十年間の修行を続けた比叡山を下りて、京都の六角堂で百日間の参籠に入り求めた道でした。

「生死（しょうじ）」は仏教用語です。生命あるものは、生まれ変わり死に変わりする輪廻（りんね）（*7）を転生する、そして人生は煩惱と迷いの世界であることを指しているのです。仏教徒は、この生死の世界から出る、解脱する、悟りの世界を求めて修行をします。

親鸞は、六角堂での参籠の九十五日目の暁に救世観音菩薩の夢告を与えられました。その夢告は「行者宿報の偈」といわれています。

「行者よ。もしそなたが己の意志や思い、精進ではどうにもならぬ人間の性によりて、戒律で禁じられている女人との交わりをもつならば、その女人こそが、このわれ救世菩薩の化身であると思われよ。人間はわが身の煩惱を通してこの世の最も豊かなものと出遇うのである。而してその煩惱に導かれて浄土に生まれていくのである。これこそがわが願いであり誓である。行者よ、このことを深くわきまえ、すべての人にこのことを語られよ」

（右記の偈文は『親鸞物語』西原祐治著 朱鷺書房出版より引用）

というお告げでした。親鸞は、六角堂を出て法然のもとに弟子入りしました。そして法然のもとで、恵信尼と結婚されました。

親鸞自身は自分のことを語り、また、書き物にほとんど残していません。ですから近代明治時代まで親鸞の実像はよくわからないままでした。大正十年（一九二一）西本願寺のお蔵から『恵信尼書簡』が発見されました。それにより親鸞の実像、比叡山での修行、流罪後の越後での生活などさまざまなことが明らかになりました。『恵信尼書簡』は一二五六年恵信尼七十五歳のころからお亡くなりになる一二六七年八十七歳までのお手紙です。

一二六三年親鸞が入滅のとき恵信尼は越後に居られました。その翌年八十二歳のとき、親鸞をみとった娘の覚信尼へのお手紙に、

「（前略）山を出でて、六角堂に百日こもらせ給いて、後世を祈らせ給けるに（中略）生死出づべき道をば、ただ一筋に仰せられ候しを、うけ給はり（後略）」

と、観音菩薩が女性の姿となって、親鸞を救おうとした出来事などがつづられています。

（右の手紙文章は『親鸞と恵信尼』今井雅晴著 自照社出版より引用）

人間は生を得てから死に至るまで、「四苦八苦」の人生といわれます。生老病死の四苦、そして、残りの四苦は愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦そして五蘊盛苦の四つです。

〔四苦八苦〕については、親鸞の語る浄土の話（9頁）参照）

世々凡人の苦は、歌謡曲の名曲として歌い継がれています。次の三曲を紹介します。

『酒は涙か溜息か』、『風のみち』と『私の小さな幸せの花』です。

まさに人間の煩惱（*2）とその浄化の歌にほかなりません。臨終の間際にまで消すことのできない煩惱です。

昭和の初めに歌われた『酒は涙か溜息か』の歌詞には、仏教でいえば人間の煩惱が切々とつづられています。高橋掬太郎が初めて作詞して藤山一郎が歌って大ヒットしました。今でも歌い継がれています。最近ではYouTubeで、島倉千代子や八代亜紀らが、歌唱力豊かに、見事に歌っているのを聞くことができます。

『酒は涙か溜息か』

酒は涙か溜息か

心の憂(うさ)の捨てどころ

遠い縁(えにし)の彼の人に

夜毎の夢のせつなさよ

酒は涙か溜息か

悲しい恋の捨てどころ

忘れたはずの彼の人に

残る心をなんでしょう

作詞 高橋掬太郎、作曲 古賀政男、歌 藤山一郎(一九三二年)

「縁」は、人との縁、仏教では、自然の事象は全て「縁起」に基づくとしています。「せつなさよ」、「なんとしよう」という思いは、諦めに転じていくのでしょうか。

彼岸の向こうの浄土に往かれた彼の人を恋い慕う歌です。

『風のみち』

落葉のいたみ 知りすぎたけど

風に吹かれて 帰りたい

いろんな事が ありすぎたから

風と一緒に 帰りたい

愛して泣いた あの秋へ

きれいな別れ 確かめに

あゝ人の世は 風のみち

行きつく先は 遠くても

作詞 杉紀彦、作曲 浜圭介、歌 島倉千代子（二〇〇四年）

一九五五年十六歳で「この世の花」を歌いデビューした島倉千代子が、六十六歳のとき歌手生活五十周年を記念したコンサートで歌ったのが、この曲です。

「風のみち」は、いたみ、苦しみを知り過ぎて、そして往く浄土への道でしょう。

『私の小さな幸せの花』

心の庭に咲いている 私の小さな幸せの花

あの日の母の歳を越え 今でも道には迷うけど

いつもあなたが胸(ここ)にいて そっと支えてくれている

誰も知らない花でいい まあるい笑顔でいればいい

私の小さな幸せの花

作詞 友利歩未、作曲 杉村俊博、歌 島倉千代子

二〇一〇年に、島倉千代子が七十二歳のときに歌っています。心の中に咲かせることができた花は菩提心だろう。多くの苦しみや悲しみが浄化されて、綺麗な歌になっています。浄土に往かれた母が、私の胸に還ってきていると歌っています。

島倉千代子はこの曲を歌った三年後の二〇一三年十一月八日に七十五歳で往生されています。

あとがき

神仏に祈るとか、悟りを得るために修行をする、ということを親鸞は否定しています。誤解をしてはいけないのは、神や仏の存在とか、修行をすることを否定しているのでは決してないのです。それを抛り所にして、その結果を期待して、御利益（ごりやく）が得られる、悟りに至れるという心を否定しているのです。逆に、親鸞は、仏が全ての人を救済する慈悲の無限の力を持っている、その仏に帰依する人は、浄土の彼岸に往生して悟りに至ることが出来ると、説いているのです。仏へのご恩を謝する、報恩の礼拝を大事にしています。

最近の世論調査で見たのですが、宗教心のある人の割合が、西洋では50%でした。ところが日本では4%そこそこということです。日本人は無宗教という人が多いのです。それだけ日本は幸せな国なのかもしれません。

心身に病が無く健康で、資産があり年金などで経済的な不安がなく、医療・介護施設が整備されて老後の生活に心配ない人はいいでしょう。そのように老後を過ごすことが出来る人は幸せです。しかし、そういうことで老後の安心が決して保証されるものではありません。

せん。病氣や身心に障害が、高齢化が進めば必ず出てきます。人生の最後に、一人で老後を安心して過ごせる心の準備がなくてもいいのでしょうか。

歳を重ねると、人生で「大きな物語」を思いめぐらすこともできます。そして、無心になる、無我になるという心境で死が迎えられるという心の準備にもなるでしょう。

現代の私たちにとって、凡夫とか悪人といわれると、とても自分のことかと、素直に理解しがたい面があります。『歎異抄』で語られる言葉は、現代の私たちにも理解できることです。他人のことではなく、私たち自身が、凡人であるという自覚を持って、自分自身の心を見つめ直して味わいたいと思います。

親鸞は「念仏には義なきをもって義とする」と、親鸞が八十六歳に至って表現できた、悟りの世界なのでしょう。親鸞は阿弥陀仏（弥陀）の本願を信じ、領解することは難中の難だといっています（正信偈）。念仏で往生できるということは、義なきをもって義とする、ということが、ずとんと胸の中に落ちてくるとき、分かってくるのでしょうか。

私は、会社を定年退職後二〇〇六年、六十五歳のとき中央仏教学院通信教育部学習過程

に入学しました。学習過程を経て専修過程を二〇一二年に卒業しました。その後は築地本願寺の学びの会で、多くの高名な僧侶先生方のお話を聞くことが出来、また多くの法友が出来ました。

私にとって忘れられないのは、長崎県平戸市青洲会病院の医師をしていた義弟の山口剛がALS（筋萎縮性側索硬化症）を発症して、パソコンでいろいろと交信をした思い出です。次第に、手足を動かすことも口の筋肉も動かなく食事も自分でとれない状態になりました。人口呼吸器をつけ、すでに言葉は発することはできず、唇のわずかな動きを検知するタッチセンサーで操作する「伝の心」というパソコンのアプリで打ち込んだメールが届きました。

「僕の病気は発症から一年も経たないうちに、この病気の症状をほとんど完成してしまいました。予想外に早い経過の中で、患者の身体的苦痛と共に心理的精神的苦痛の臨床症例を、身をもって体験したわけです。今日を生き、そして明日以後を生き続けるための強い動機、生きることの意味が必要なのです・・・。」

思い通りにならない身体へのいらだち、苦悩を打ち明けるものでした。私は、

「発病の原因も治療方法もわかっていないALSの患者は日本に七千人以上いるといわれている。医師としての剛に、難病であるALSの原因究明、治療法や介護のための装置の開発に役立つてほしい、多くの患者に生きる道を示してほしい」

と、そんな願いを込めて返事を書いて返信しました。

それから、毎日『歎異抄』の第一条から第十八条までを、一条ずつメールで送りました。そして、あるとき、剛に、メールで聞きました。

「死後の世界に極楽浄土があり、往生することを信ずるか」

剛から、はつきりと返信が来ました。

「往生を信じている。小松左京の小説『神への長い道』を思い出します。毎日が念仏三昧です」

これが剛と「伝の心」で心の内を語り合う最後のメールになりました。

本書を書くきっかけは、NHKエテレこころの時代「宗教・人生」の番組で、阿満利磨

先生の連続講座「歎異抄にであう―無宗教からの扉―」を二〇二二年四月から九月に聞いたときでした。阿満先生は、仏意というのは、自分の身を通じて思いめぐらして考えなければ、決して分らないと仰いました。私は、『歎異抄』を私の自分の言葉で書いてみたいと思いました。先生は『歎異抄』講義』という本も出版されています。

そして二〇二四年七月、笠間の西念寺の市民大学講座で伊藤益筑波大学名誉教授の「浄土論―仏法は宗教か?―」を受講しました。先生は哲学・思想学者で著書『親鸞―「歎異抄」を手がかりとして』を出版されていました。大変難解な本でしたが、繰り返し読みました。親鸞の説法に対する門徒の誤解を唯円が指摘しますが、その論理的な裏付けを親鸞思想の緻密な論証とともに解き明かしてくれました。

最後に、この親鸞の「大きな物語」を理解するためには、親鸞が、「弥陀に帰命する」という、絶対的に弥陀に皈依する、すなわち「ゆだねる」「おまかせする」という信心正因の心が、私たち自身自身に、なんの疑いもなく起こることが必須だと申し上げたいと思います。おまかせするというのは、母親に抱かれた子どもが、絶対の信頼に身をゆだねている

ときの笑顔です。病に侵され余命を宣告された患者、心身に重大な傷を持った障害者や、老後に頼れる人がいなくなった高齢者、そういった人でも笑顔が生まれる「大きな物語」が『歎異抄』です。

日立市の教育会館（多賀図書館）でシニアのための読書会を開催することにしました。第一回で『歎異抄』を取り上げ、私が話をすることになり、テキストを作ったものを、一冊の本にまとめてみました。愚足凡夫の私が、『歎異抄』に挑戦したわけです。

二〇二五年二月二十日 久保裕

『歎異抄』を読む

人生一〇〇年時代の「大きな物語」

義なきをもって義とする

著 者 久保 裕

発 行 二〇二五年二月二十日

発行所 NPO法人コミュニティNETひたち

日立市末広町一・一四 教育会館四階

販 売 Kindle 版 Amazon.co.jp